

389
72



始



389-72



曾我の家五郎著

曾我の家五郎喜劇全集第二編

株式會社 大 鐙 閣 刊

大正
11. 3. 23
内交

郎五家の我々の時當朝歸リよ洲家



LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO

第五案の委員の時議録の附録

曾我の家五郎喜劇全集 第二編

目次

一 純金の箸……………一

一 鐵成金小山平助宅應接室の場……………四

二 諏訪山公園の四阿家の場……………五八

二 時の縁……………八一

一 櫻田家庭前の場……………八三

三 彌兵衛の榎……………一二七

一 泉州百鳥村榎前の場……………一二九

二 新田家の別荘座敷の場……………一四四

目次

一



純金

の箸【三場】

目次

二

四 出世の鼻……………一六九

一 芝御靈屋の御門前……………一七三

二 久利加羅龍五郎の宅同裏口……………二〇八

三 有馬家の御錠口……………二三三

五 鬼 薦……………二四一

一 畫伯松本新花畫室の場……………二四四

二 同家裏口の場……………二七五

三 同家茶の間の場……………二九五

目次終

(一) 鐵成金小山平助宅應接室の場
(二) 諏訪山公園の四阿家の場

登場人名

小山の先妻	小山の悴	紙屑屋	資産家	小山の妹	工科大学生	同人妻	鐵成金
おひさ	貞之助	田中文吉	福井芳藏	お秀	松岡要	おまき	小山平助

龜鶴	蝶丸	蝶六	致雄	大磯	一郎	花菱	五郎	【併優】
----	----	----	----	----	----	----	----	------

旅料理屋若者僧	園丁	煙草賣者	勞働者	刑事巡查	仲居	半玉	株式仲買人	小山の女中	小山の店員
				小辰	おかつ	友葉	樋口彌之助	お和今	石井和一

笑將	一雄	時次	胡蝶	蝶七	林蝶	五蝶
----	----	----	----	----	----	----

(1) 小山家應接室の場

本舞臺西洋室、正面一尺高の硝子扉出入口、上下に硝子窓何れも開き有る上品なるカーテンを掛ける。上手稍々内へ入りたる處に、大理石の柱柵の上に裸體美人の像盛花等、其の上手奥へ通る出入口、同じく下手にカーテンを掛けたる入口舞臺中央大の丸卓其の上に、灰血新聞インキ壺呼鈴水菓子盛りたる籠、立派なる菓子器をニツケルの盆に載せ、純金の箸を添へある。上等の椅子四五脚、上手に安樂椅子、正面に立派なる置時計、上下の壁に油畫の額を掛け、總て小山家應接室の模様、眺への囃子にて幕開く。

ト小山平助は成り上りの紳士の扱へにて安樂椅子にかけ新聞を読み居る。卓上の電話の鈴なる。小山は受話機を取りて電話の應答をする。一萬五千圓の借金の斷をして電話を切り、稍々心配の體にて椅子にかけける。此の時女中お今コーヒ茶碗に茶を入れて持來る。

お今「旦那様お茶一ツ」

ト出す、小山は無言の儘卓の前に來りて一ト口呑み、

小山「なんだ、此のコーヒはかうミルクを澤山入ては仕方が無いぢやないか、苟も上流の家庭に上女中として奉公する身が、コーヒ一ツ満足に入る事が出來

ぬよふでは、一ヶ月六圓の月給は何の爲に拂ふのだ」

ト小言を言ひ居る、以前より上手に後妻おまき、此の様子を聞いて居て此の時ツカツカと前へ進み來り、

おまき「私が入れたのですが不可ませんか」

小山「チャお前が入れたのか、俺れだから宜いが斯んなものはお客には出せないから注意しなければ不可ないよ」

おまき「エ、夫れはごうせ、先の奥様のよふな譯には參りませんから」

小山「タイ……氣まづい事を言ふものぢやない、奉公人が居るぢやないか」

お今「イエー、何卒御遠慮なく」

おまき「誰が奉公人に遠慮するものか、化け臍め」

お今「奥様御言葉で御座りますが、生憎私しのお臍はまだ化けて居りませんので」

おまき「誰れがお前の臍が化けて居る言ふた、お前の様な出過ぎ者を化け臍言ふのぢやへ、ヨウ覺へておきやあがれ」

小山「タイくおまき、苟も上流の奥様が、おきやあがれごゆふ事が有るか、夫れでは客でも有れば、小山家の夫人としての價値がないぢやないか」

おまき「カチがなければ負けておきますがな」

小山「勝負ぢやない、價値ごは値打がないごゆふのだ、實際お前は無教育で困る」

おまき「無教育は承知で初めから内へ入れなはつたのやないか、元々奥様なんてッ

言はれる柄ぢや無いよつて、堪忍しておくなはれ、矢張りバアーで働ひて居る方が氣樂やミ、何んほ貴方に斷りを言ひました」

お今「へー奥様はバアーに御出で遊ばしたので御座いますか」

おまき「之れでもな楠公前の相生カフェーで、白のエプロン掛けて働ひて居た時分は、此様な顔でも随分人に騒がれてなア、此の旦那はんかて毎晩々々通ふて見え
て……嫌やく／＼ごゆふのに……」

小山「馬鹿、宜い加減にせんか」

トお今に向ひ、

「貴様又何にを感心して聞いて居るのだ、用が濟んだら彼方へ行け」

お今「ハイ何卒おゆるりこ」

トすまして上手へ這入る。おまきもブンとして表へ出かける。

小山「タイ貴様何處へ行くのだ」

おまき 「ごうせ奥様ご云はれる値打のないものですよつて、一遍お母アはん處で相談して來ますのや」

小山 「チイ／＼奉公人の前だから、あの様に言ふたのだよ、俺れの前なら幾等氣儘しても好いだのよ、サア／＼機嫌直して此の椅子へおかけよ」

ト椅子を與へながら、

「先の女房を追ひ出しても、一生傍へ置きたいと言ふ戀女房ぢやないか」

おまき 「イ、エ女房ご違ひまつせ、妾かけだつせ」

小山 「そんな皮肉な事を言ふものぢやないよ、慥うして内へ這入つて居ればモウ本妻も同様ぢやないか」

おまき 「嫁はんなら嫁はんらしいして貰いましよふ、言憎ひ事やけご貴方の妹の御秀はんでも、お姉はんでも、言ふ事がおまきさん／＼丸で下女やがな」

小山 「サアあれも近々嫁に行く體だ、モウ長い事同じ家に暮すのぢやない」

おまき 「サアお秀さんは嫁に行く人でも、未だあのチンピラが居ますがな」

小山 「チンピラは貞之助のこゝかい、あれは小供ぢやないか」

おまき 「サア子供丈けに尙憎らしい、此の間も何にやらで一寸叱かつたら、妾の癖に八ヶ釜敷く言ふないと言ひますのぢや、餘んまり腹が立ちました依て、頭をボシミいてやつたら、私しの手には噛み付いて、未だ齒形が残つてます、先の貴方の嫁はんは犬の年かいな」

小山 「マア／＼我慢せいよ、あれも氣に入らねば東京の學校へ留學さして仕舞ふよ、今にお前が思ふ様な家庭にしてやるよ」

おまき 「貴方は口で斗り甘い事を言ふて、此の間頼んだダイヤの指輪も未だ買つておくなはれんやないか」

小山 「夫れも氣になつて居るのだが、知る通りの暴落で一吋今度は損が大きかつたのだ、今に盛り返して、ヨリ以上の大きなダイヤを買ふてやるよ」

おまき 「何んほ損をしたと言ふても、斯んな贅澤な暮をして一寸御客様に上げるお菓子の箸が純金で、これ御覽百目からおますやないか」

ト金の箸を手の平へ乗せて目方を見る。

小山 「夫れは小山家の體面上、少々位苦しく共純金の箸の一對も客室に無けりや紳士の體面にかゝはる、つまり營業上の一種の懸引さ」

おまき 「そうするに此の箸は紳士と言ふものゝデッテルだすな」

小山 「之れは奇抜な名言だ、デッテルで品物が宜ふ見えるからね……」

おまき 「そんならダイヤも奥様のデッテルだんがな、買ふこくなはれなア」

小山 「お前のデッテルは立派に有るぢやナイカ」

おまき 「何處におます」

小山 「ソレ其の可愛らしい笑窪がな」

おまき 「マア……」

ト嬉しげに小山を抓める。

小山 「ア、痛い……」

ト此の以前より中央の扉を明けて店員石井出て、此の様子を見て居る。此時突然に、

石井 「餘ッ程痛む様でしたら、御藥を差し上げませふか」

小山 「チャ貴様何時の間に来て居たのぢや」

ト一寸體裁惡げにして問ふ。

石井 「ハッ先刻から」

小山 「先刻ならナゼ知らさ無いのだ」

石井 「御話中でしたから、混線してはご存じまして、エへ……」

ト薄氣味惡き笑ひをする。

小山 「變な笑方をするな、用は何んだ」

石井 「御來客で」

小山「誰だ」

石井「松岡要さんで」

おまき「要さんとは聞いた様な名前だすなア」

小山「ア、イヤ夫れは何んだ、アノ三井物産の人で……」

石井「イ、エ違います……アノ」

小山「違ひますて貴様が知るか、黙つて居れ」

ト態と叱り付けて、

「ア、又製鐵會社の創立問題でやつて来たねへ……」

おまき「又六ツかしい判らん話しかいな、私は此の間にお湯へ這入ておきますわ」

小山「チ、爾ふするがよい、……」

おまき「貴方も用が濟んだら早ふ御這入り、風呂場で待つて居ます」

小山「ヨシ……」

おまき「誰れぞ風呂の加減を見てや」

ト上手を向ひて高聲で言ふ。

小山「大きな聲だな」

おまき「昔の癖でなアホ、……」

ト笑ひながら上手扉へはいる。

小山「チイ石井、あれの傍で注意して呉な困るぢやないか」

石井「ヘエ要さんの事を申上げては不可ませんので」

小山「無論だよ、要は前の妻の舎弟言ふ事を彼は知ら無いから宜いが、モシ知れたればあの嫉妬やが大荒だよ」

石井「ア、左様ですか、之れはごうも」

ト頭を掻く、

小山「之れはごうもぢやない、其んな先の見えな事ぢや、將來立派な商人に

て社會へ立てないよ、又要なんぞが僕に逢ひたいと言ふて來ても、不在でも言へば好いのに」

石井「デモ旦那と奥様ご嬉しそふな御笑ひ聲が、御門の處まで聞えて居たのですもの、眞逆御留守も申せませんので」

小山「マア仕方が無い、通せッ」

石井「ハアア」

ト元の扉へ這入りかけて、

「松岡さん、何卒此方等へ……」

ト之れにて松岡要鐵工所の淺黄服を着て出來り、

松岡「兄さん今日は」

小山「オ、要さんか」

ト椅子を進めながら、

「マアお掛なさい。君兄さんは困るねへ、モウ君の姉さんとは縁が切れて居るのだから、言葉に注意してくれ玉へ」

松岡「兄さんご申上げて悪るければ申ませんが、未だ姉が離縁になつたと言ふ正式の手續が済んで居ませんねへ」

ト睨めつける、小山はヂット思入有つて、

小山「オイ石井、用が有れば呼ぶ、彼方へ行け」

石井「ハイ——」

ト元の處へ這入る。

小山「オイ要さん、そふ開き直つて物を言ふな、デハ今日正式の離縁の手續を請求に來たのか」

松岡「離縁請求に來る位なら、頭を下けて参りません、貴方は何んごも思ひますまいが、姉が毎日泣いて居ます、嫌はれたのは仕方が無いが、只貞之助の事が

氣に掛るこ、此頃ぢやロク／＼食事も仕ません、兄妹ごして僕は見るに忍びません、一體姉の體はごうして下さるのです」

小山「ごうしてくれるこは、ごふするのだへ、僕も昔ご違つて今日では相當の紳士として妾の一人や二人は男の働きだよ、昔の裏家住ひの小山平助ごは違ふからねへ、夫れを愚圖／＼言ふから出て行けご言へば、ハイ出て行きますご立派に言つて出て行たのぢやないか、今更我輩にごうして呉れるこは、聊か脱線だね」

松岡「其れは賣り言葉に買ひ言葉です、畢竟貴方が今度の戦争で不思議に大金を儲けなされたから、斯んな結果になつたのでせう、昔の儘なれば貞之助ご言ふ子供迄有る女房を追ひ出す程、無情な貴方でも有りますまい」

小山「そんな愚痴を俺れに言つたつて仕方がない、俺れが金持に成つたのが不平なら、獨逸のカイゼルか聯合軍にでも言ふごよいアハハ、」

松岡「イエ決して貴方の成功を恨む譯では有りませんが、姉にすれば女の事ですから愚痴が出ます」

小山「そんな愚痴を言つたつて仕方が無いぢやないか、今日結婚して翌日離縁になる例も世間には澤山あるのだからな、要するに彼れは家風に合は無いのだからねへ」

松岡「サア結婚をした當座なら缺點が判らなかつたご言ふ理由も有りますが、二十年近く連れ添つてモウ十七になる貞之助ご言ふ子供まで有るぢや有りませんか二十年目の今日に家風に合はぬごは言へますまい、立派な理由を聞きます迄は僕は斷然此處は去りません」

トキットなり、片足を自分の膝の上に上げて勢ひ強く力む。

小山「貴様脅迫に來たのか」

松岡「脅迫ごは何んです」

小山「脅迫ぢやないか、賤い労働者が紳士の邸宅に安座をかいて動かないごは立

派な脅迫ぢやないか、争ふ事があれば法廷へ出よ、歸れッ」

ト此の時上手より女中お今出來り、

お今「旦那様奥様がお湯から御召で御座い升」

小山「ウム今直ぐ行く言へ」

お今「ハイ」

ト元へ立去る。

松岡「奥様は誰れです」

小山「我輩の第二の妻だ」

松岡「モウ後妻まで……萬事窮す……お邪魔しました」

ト落膽の體にて立上り歸らんとする、

小山「オイ待て、明日にも立派な正式の離縁の手續をするごお久にもそふ言つて置け」

松岡「望む處です、貴方の様な冷血な人に離縁される姉さんは、非常な幸福な人です」

ト出かける、卓上に帽子忘れたる小山取つて、

小山「オイ帽子が有るぞ」

ト渡しかける、松岡ツカく來りて、

松岡「さはつて下さるな、帽子が穢れます」

ト引たくり、荒々しく元の處より立去る。

小山「十年以上も冠つた帽子が、穢れるも無いものだ、アハ、ハ、ハ、」

ト此の時上手より妹お秀手に風呂敷包を持って、ツカくと出で來り、

お秀「兄さん今の聲は要さんぢやないの」

小山「エ、……イヤ違ふ三井物産の人だよ」

お秀「アラ爾ふ、よく似た聲だと思つたは」

小山「貴様要の様な男の事斗り思つて居るからだ」

お秀「其りや貴方未來の夫ですもの」

小山「馬鹿誰れがあんな者ご結婚さすか」

お秀「だつて兄さん前の姉さんも私しの十五年に約束を仕たのですもの」

小山「其の時ご今は身分が違ふよ」

お秀「身分が違つても、約束は約束ですは」

小山「不可ない、お前の夫ご言ふ人は兄さんはチャント外に極めて居る」

お秀「エ、」

ト驚き一足進み出で、

「兄さん、夫れは亂暴だわ、夫れでは人間の道が間違つて居るわア」

小山「正確な汽車の時間表でも間違ふ時は間違ふのだ、況や刻々ご變化する人の境遇、間違ふのが當り前ぢや」

お秀「幾等當り前だつて、人道ご鐵道ご同じ様に言ふ人が有るものですか」

小山「人生も一種の鐵道旅行だ、小山村ご言ふ列車の信號旗は俺れが持つて居るのだ、止まれご俺れが赤旗を振れば、お前は止まらんけりやならんのだ」

お秀「嫌だわ、そんな赤旗は横目に睨んで急行列車ビューご通過だわ」

小山「夫れぢや小山村は顛覆してもいゝのか」

お秀「顛覆するごはごうなるの」

小山「モウ今日翌日に差押に逢ふのだ」

お秀「エ、兄さん本當なの」

ト驚き、

小山「實は俺れ一人の胸に納めて誰れにも知らしたくないご思ふたが、モウお前の力を借りるより道は無いのだ、肉縁のお前だから秘密を明ける、僥倖ご言ふか幸運ご言うのか、多少古鐵を玩弄つて居た御蔭で、今回の戰亂に乗じて、一足飛

びに十萬以上の金儲けをして、お前にも夫れ丈けのなりをさせる身分になつたが人の慾には限りがないもので、尙一層慾が出て實は先月米に手を出した」

お秀「エ、相場に……不可なかつたの……」

小山「不可無いにも何にも、今の財産全部放出して未だ一萬圓斗りは不足だらう」

お秀「夫れゆへ私しは常から申上げたぢやありませんか、兄さんの腕で儲けたのには違ひはないが。餘り兄さんが贅澤すぎるわ、矢ッ張り御手に覺への有る金物屋でもして、ジミに暮して下されば好いにねえ」

小山「所が世間ぢや、爾うはさせない、ヤレ紳士だヤレ手腕家だご煽動るから、ツイく此方も好い氣になりて、慾も出れば見得もある、今小山家を顛覆さす言ふ事は、實に世界へ極りが悪い斗りぢやない、俺れ一代の仕事として實に口惜しい、此の苦境を助けて呉れるのはお前よりないのだ、俺れが取引上の交際で福井といふ好紳士だ、年は四十餘りだが男振りも好し頭も宜し、殊に數十萬の資産

家だ、お前が其の人と結婚して呉れよば、其の縁に縋つて三萬や五萬の金は融通するぞ、暗に先方から乗つて來ているのだ」

お秀「其の方は私を御存じですの」

小山「お前のお花の歸り道に、必ず其の人の門を通るので、先で色々手を廻して俺れの妹に知れたから、是非に云ふ申込みだよ、飢えたる狼は食を撰ばずの格言通り、宜しいと俺れは承諾したのだ」

お秀「兄さん、夫れは慘酷だわ、女一代の大事件を犬の子でもやるよふに、一人で極めて下さるのは、餘んまりだわ、私しは要さんと言ふ約束の人も有りますし今外へ縁付いては、姉さんにだつて濟みませんわ」

小山「姉さんごお久の事か」

お秀「エ、そうですわ」

小山「あれはモウ離縁の手續を今日翌日にするのだから、お前の姉でも何んでも

ないよ、義理なんか有るものかねえ」

お秀「兄さんは今の姉さんの色香に迷つて、そんな無情な事を仰在つて姉さんを御離縁なすつても、私しはそんな附合は嫌よ」

小山「附合は嫌だこは、お前は要のよふなものを諦められんごゆふのか」

お秀「お言通り」

小山「ナゼ諦められぬのだ」

お秀「私の方が惚れて居ますもの」

小山「馬鹿、何ぜ惚れたか」

お秀「ナゼ惚れたかこは、随分無理な御質問ですねえ、咲くべき花が咲いたこて怒るご同じ事よ、兄さんだつて今の姉さんに何ぜ惚れたのこ私が聞けば、何んごお答へなさいます」

小山「それ迄は考へて居らん」

お秀「それ御覽なさい、我が身を抓つて人の痛さを、よく考へて下さいねへ……」

私しは稽古に行つて参ります」

ト立上るを、

小山「さてッ、貴様が稽古に行つて歸る時分には、モウ此の家は強制執行に逢ふて、全部封印がついているぞ」

お秀「エ、」

小山「火急に迫る今日の場合、兄の爲ご思はないで小山の家の爲ご思つて何卒承知をしてくれい、見よ此の通り両手について頼むく」

ト両手をつき卓へ頭下げる。

お秀「夫れ程苦しい立場なら」

小山「聞いて呉れるか」

お秀「矢ッ張り嫌です」

小山「嫌なら此の家は競賣にされるぞ」

お秀「薩張りして好いでせう」

小山「ナニ薩張する……」

ト怒りを含んで言ふ。

お秀「兄さん興奮しないでお考へなさい、私は競賣賛成だわ、私はそれが本當の幸福だと思ふわ、失禮ながら兄さんの今の財産は汗と油の結晶ぢやないわ、言はば戦争と言ふ旋風で、裏家住ひから此の様な立派な家へ風の都合で吹き上げられたのだわ」

小山「奴唄みたいに言ふな」

お秀「エ、唄だわ、併も糸目の切れた奴唄よ、愁ひ斯んな所へ引掛つたから、ヤレ自動車だ、上女中だ、家だ、骨董だ、ソレ其處に有る純金の箸で人に御菓子を出して見榮も張りたくなりますの、そんな事位で濟めば宜しいが、永年連綿ふ

た義理有るおさなしい姉さんを追出して、素性も知れない者を内へ入れるわ、一人よりない大切な男の子は學校へも行かずに遊び廻つて、聞けば十七やそこらで藝者狂ひ、ア、不幸な家庭だ、私は毎日泣いていてよ」

トト足進み出て、

「兄さん、誠小山の家の幸福を思つて下さるなら、昔しの裏家住居に戻つて下さい、親子兄妹睦じく笑ふて暮す昔に返つて下さい、貴方はお氣が付きますまいが、メツキリ此の頃御顔も瘦て皆虚榮云ふ慾のカンナで貴方の肉を剥づるのですよ」

小山「嫌だッ、假令肉は剥られても不肖小山の體に一滴の血でも有る内は、其血液は熱して居る、高名心に煽られて居る、此の儘落城する様な弱い人間には成り度くない」

お秀「成りたく無いと仰在つても、既にモウ成つて居るぢやありませんか、大抵

世間の金持が落目になつた其の時に、一ト思ひに裏家へでも這入る決心が付けば多少の物も残るのです、下だらぬ見榮で世間に隠くそうこするものですから、仕舞にはドン底まで落ち果て、身の置く處も無くなる試は世間に幾等も有ります、弱く成つた人間が強い人間の眞似をするのは負惜しみです、僅の間でも榮華をして、夫れを又々失敗したのは宜い經驗だご諦めて、潔よく全財産を借り方へ投げ出して、笑つて元の裏家住居、ごんなに男らしいでせう、アノ晴れたお月様を見るようだわ」

小山「嫌だ、俺れは晴れた月を眺めて寝て居る様な生活は嫌だ、望んで暗夜の暴風雨に乗り出して、荒れ狂ふ大波の大海を乗り切つて見るのが痛快だ、俺れの趣味だ」

ト興奮して言ふ。

秀「デモ運命には勝てませんからねえ、あれは屹度浮世の荒波に漑はれてゆか

れます」

小山「サア其の運命の燈明臺の燈火をつけてくれるのは、兄妹の情ぢやないか」

お秀「福井ご言ふ人間ご結婚せよご仰在るのですか……」

小山「一生の浮沈だ助けて呉れ」

お秀「嫌です」

小山「それぢや俺れが難船するぞ」

お秀「何卒御遠慮なふ」

小山「御遠慮なくごはなんだ」

ト怒る。

お秀「言ひ過ぎて済みませんが、私は財産家は嫌なの、金のある方は兎角夫婦の愛情が乏しいの、直きに藝者狂ひをしたり、憐な人の娘を弄んで妾にしたり、殊に親が残した財産で紳士顔をして居る、そんな男は世間の苦勞を知りませんか

ら、一朝今の兄さんの様な身になれば喰べて行く道さへ判らない、言はゞ人間の剝製の様なお婚さんは眞平、假令其日暮しの労働者でも、一ツの専門の技術を持つたお方が、私の理想なの、不悪す」

ト小山は卓上に兩腕をつき、兩手で頭を押へ煩悶の體にて俯向く、

「兄さん加減が悪いの、言過ぎたら堪忍して下さいな、私し御稽古に行つて來ますよ……兄さん」

ト聲をかける、小山無言にて考へ居る、お秀はソツト下手扉へ這入る、入違ひに下女お今はお秀の忘れたる風呂敷包を取りに来る、小山は其れに氣づかずお秀の積りで、

小山「ライ」

お今「ハイ」

小山「助けてくれ……」

お今「助けて呉れどは」

小山「何卒嫁に行つてくれ」

お今「何處へで御座ります」

小山「福井の處へ」

トフト額を上げ、

「馬鹿、貴様か……」

お今「ハイ」

小山「秀はごうした」

お今「ハイ只今勝手元の方からお裁縫のお稽古に、此の風呂敷包をお忘れになりましたので取りに参りましたので」

小山「マア早く持つて行け……」

お今「ハイ……」

トお今元の處へ去る、同時に正面の扉より驛井芳造當世風の若作り紳士風にて、洋服

にてヌート出る。

福井「小山さん今日は」

ト小山は之れにて顔を上げ。

小山「チャ、これはく」

ト椅子を放れて、

「福井さん、ようこそ、餘り突然で驚きました」

福井「御案内も乞はないで失禮しました」

小山「サア此方等へ」

ト椅子を進めながら、

「よく判りましたねえ」

福井「ハイ立派な御邸宅ですから直ぐ知れました」

小山「イヤお耻しい事で残念な事でした、今迄お秀が宅に居りましたに」

福井「人間の剝製は御目に掛らない方がいゝでせう」

小山「チャ夫れぢや今の話をお聞になつたのですか」

福井「小山さん、僕は女に縁が遠いですなア」

ト落膽する、双方よろしく氣味合の思入にて椅子に付、

小山「お聞になつたごあれば今更お隠しはしませんが、何アに何んと言つても子供ですから、單純な彼等の理想は刻々に變化するのですもの、貴方のお人格ご其の男振りを當人に見せたらば、直ぐに心が動きますよ」

福井「男振は左程悪いと言ふ方でも有りませんが、只だ不幸にして財産の有る家に生れたのが終生の恨事です、ナゼ勞働者の家に生れてこなんだでせう、噫感極まつて涙です」

小山「有り難ふ不肖如き者の妹を夫れ程迄に思つて下さるごは、感謝の外は有りません、其の御厚意に報います、彼れが何んと言いましても必ず此の縁談は兄の

権利で纏めて見ませう」

福井「小山さん、有難う幸ひ其ふ云ふ事になりましたら、兼ての御約束の二萬圓御用達處じやない、全財産を貴方に提供して、身は一労働者となりまして本懐です、寧ろ最愛の妻の理想に従つてやるのは、夫の愛情です」

小山「夫れでは労働者になつて下さい」

福井「エ、今直ぐですか」

小山「イエ夫れが妹の頭を動かすべき一種の計略です、結り貴方が労働者の眞似をして下されば宜いのです」

福井「僕が労働者の眞似をしてごうするのです」

小山「彼れは裁縫の稽古に出かけましたから返りは必ず四時過ぎで、アノ諏訪山の蓮池の畔りを通りますから、そこで偶然逢ふた様な顔をして妹を貴方に紹介しますから、其の時に口から出鱈目に金持を悪くいつて、一トつの専門の技術を有

して居る様に言ふて貰らふのです、左すれば妹の理想通りなり、貴方のお人格男振りなりでキット好いたらしい人ご彼れは信ずます、其の虚に付け込んで、甘く傍からバツを合せますから、其うなれば話はトン／＼拍子に進みます」

福井「成程夫れは結構ですが、後で僕ご知れたれば大變でせう」

小山「ナニ何處かで假祝言でも仕た後で知れたつて、其處はモウ出来て仕舞つた後ですもの、彼れも承知しますよ」

福井「随分危険な手段ですなア」

小山「目的の爲には手段は撰ばずです、我が輩も貴方の爲に斯く迄非常手段を行うのですから、右之問題は是非御願ひ申升る」

福井「大丈夫ですも、明日でも御取引を致しませう」

小山「夫れじや善は急げですから、早く御用意をして下さいねえ」

福井「よろしい、誰れかに命じて穢ない衣類を取寄せて用意させよう、併し服装

は變へても苦みの走つた好男子三人に言はれた僕の顔が勞働者に見えませうかねへ」

小山「其處は顔でも汚して甘く變装して下さいねえ」

福井「ア、あたらしい美男子を態々穢なくして、秀さんに嫌がられやしないかしらん」

小山「フ、ン夫れが彼の理想なんですさ」

福井「お兄さん感謝します」

ト握手をする。

小山「お兄さんは氣が早いねへアハ、ハ」

ト此の時扉の外にて紙屑屋田中文吉の聲にて、

文吉「用が有るから這入るのや、放して〜」

石井「お前なんか用の有る人間じゃない、歸れ〜」

ト石井は止めながら正面の扉より出来る、小山、福井は一寸驚き、

福井「チャ御來客の様ですなへ」

小山「ナニ差支へは御座いませんよ」

福井「イエモウお暇致します」

ト立上るとたん文吉と小山と顔見合す、文吉は生酔氣分にて、

文吉「チ、平公居るか……」

小山「なんだ貴様は」

文吉「チイ知らん顔をしないな、昔は同じ鍋の飯を喰つた紙屑屋の文公やがな」

石井「コラッ貴様御主人に向つて失敬な事云ふご許さんぞ、平公は何んだ……」

文吉「平公やよつて平公やがな、小山平助で平公やがなナア、平公……」

福井「小山さん、此奴は精神に異状が有りますな」

文吉「誰れが精神に異状が有るのじやえ、ハイカラメ……」

福井「ナニ失敬なッ」

小山「福井さん、御人格にかゝはりますよ、何卒打捨てお歸り下さい、誠に失禮な奴で申譯けが御座いません」

福井「何うしまして」

ト文吉を指して、

「つまり之れですな」

勢働者の風はと目で知らず。

小山「これごは」

福井「今の見本は……」

小山「ハア、そふですく」

福井「一寸拜見」

ト文吉の傍へ行きて文吉の着物を手に持つて見る。

文吉「ヤイ何にをさらしやがるのぢやへ」

福井「イヤ好標本好モデル、グトバイ」

ト行きかける。

小山「ソレ石井御見送りを……」

石井「ハッ」

ト文吉を見返して、

「此奴はいゝですか」

小山「好イよ〜」

石井「ハッ」

福井「君御苦勞だねへ」

ト石井安心して福井を正面扉へはいる、後に二人は暫時面見合して、

小山「チャ紙屑屋の文吉君か、暫らく會はなかつたねえ」

文吉「チイ平公納るない、文吉君なんてツ、出世をしたら言葉迄變へんならんかえ矢ッ張り文公言ふてくれ、なア、チイ平公」

小山「チイ君々何んの用か知らぬが、用が有つて来たなら、酒を呑まない時やつて来い、怪しからん」

文吉「酒呑まねば、氣があかんよつてヨウ来んわえ」

小山「ヨウ来なければ来ないでも宜いぢやないか、来られては非常に迷惑ぢや」

文吉「コラッ大きな事をぬかすなえ、われが未だ古金買の時分覺へてるかえ、福原口の煮賣屋の肴の切身が外より大きよつて向迄晝飯を我慢しよふやないか、そやなこ二人で相談して透腹抱へて歩いた事忘れたか、何時やらもあふれた時に、今日は晝飯ぬきぢやぬかしたゆへ俺れが可愛相なと思ふて三錢の大盛飯一錢五厘の豆腐のしるを喰はしてやつたら、文さん此の恩は一生ヨウ忘れんぬかした事を忘れたのかえ、俺れはお前の恩人ぢやぞ、其の恩人が尋ねて来て迷惑かい」

小山「ア、分つたく、恩人々々大の恩人だ、サア之れ君に上げる」

ト紙入より小札を取り出して渡す。

文吉「チイ俺れは無心に來たのミ違ふぞ、友達が出世をしたからこゆうて無心に來るほご淋しい根生はないぞ、俺れは貴様に一寸談判が有つて、やつて來たのぢや」

小山「俺れが貴様に談判される事が有るか」

文吉「其れが有るのやえ」

小山「有るミ、何が有るのだ」

文吉「お前の元の嫁アな、あのお久はん、此の内へ入れて貰らいたいのや」

小山「離縁をしたお久の身について貴様は何んの關係があるのだ」

文吉「大きな關係が有るのぢや、今日態々工場を休んで話に來た松岡さんに、えらい生意氣な大きな事ぬかしたなア」

小山「貴様松岡を知つて居るのか」

文吉「えら知りぢや、妙な縁でな今では三の宮の五番の踏切りで、俺は松岡さん合住居して居る、お久さんもなア己れに放り出されて歸る處が無いので、其の合住居してる内へ今では歸つて居るのぢや、毎日々々子供の事や己れの事を言ふて、泣いて暮して居る、夫れを見る目が氣の毒ぢやでく」

ト文吉は涙を拭きながらワイ／＼泣く、

小山「タイ／＼男が泣く奴が有るか」

文吉「泣かいでかい、己れ見たいな薄情な人間なら泣くまいが、當り前の人間なら泣かいでかい、松岡さんが見るに見兼て話に來たら、己れモウ後妻を入れて勝手な熱を吹いたと言ふて、内へ歸つてブン／＼怒つてるわ、お久さんは泣くは、俺れが傍で見えていられるかい、今日の商賣の元金で一杯呑んで談判にやつて來た、サア平公ごうするのぢや、之れからは俺れが相手ぢや、タイ見いよ」

ト腕をまくつて、

「此の腕はなア、まだ昔しの通り可なり力は自慢ぢやぞ」

小山「貴様腕力で話の解決に來たのか、喧嘩を賣りに來たのか」

文吉「イヤ決してそんな譯やない、お久を元々にして貰らいミ頼みに來たのや」

小山「そんな頼み方が有るか」

文吉「ツイ一杯呑んでるので堪忍してやナア、平さん、小山さん、お久さんを元にして上げてなア、あアして子供迄有る仲やよつてな、コレ昔馴染や、俺れが此の通り手をついて頼むく」

トベツタリ座して兩手をつき頼む、小山は心に一物有る思入をして、

小山「ア、君は全く親切な人ぢや、正直な人ぢや、僅な縁でお久の身をよく夫れ程思つてくれる、我輩から厚く禮を言ふ、實はねえ文さん、決してお久を出した事は無いのだ、鬼千匹言ふ小姑の妹のお秀ミ馬が逢はぬのだ、君は知るまい

が明けても暮れても睨み合で、殊に我輩が何うにか社會へ出てからは、益々互に虚榮が高まつて角づき合ひ、終に此處に不幸なる結果が生じたのだ、中に挾まる僕の苦痛も察してくれ」

文吉「夫れは氣の毒な事ぢやな、話は兩方聞かんこ判らんわえ、ナア平さん、お秀さんは幾つぢや、

小山「十九だよ」

文吉「夫れは揉めるわい、モウ宜い處が有つたら嫁にやりいなア、別れて暮らしたらそんなもんやないわいなア」

小山「サア實は好い嫁入口も有るのだから、妹さへ嫁に行つてくれたら、お久も内へ呼び戻したいと思つて居るのぢや」

文吉「有り難い、早うお秀さんを嫁にやりなされ」

小山「夫れがお秀が嫌ぢやこ云ふのぢや」

文吉「先きの男が氣に入らんのかいなア」

小山「サア未だ顔も知らんのだが妹は一寸變物で財産は嫌だ、共稼ぎの労働者の處へ行きたいこの望み、なんだ向うの方は福井さんと言つて幸か不幸か財産家なんだ、其の話を聞いて妹の心を動かすこ云ふ相談をしたのぢや」

文吉「ファン感心、矢張り兄妹ぢや、お前も眞更薄情な人間やないなア」

小山「僕だつて苦勞人だよ、そこで君に頼みが有るのだ、聞いてくれまいか」

文吉「マア言ふて見いなア」

小山「其の福井さんと言ふ人は何分苦勞知らずで、只だ労働者のなりをしたこのみで口を利かして、モシモ下手な事を言ふてくれれば俺の苦心も水の泡だ、其處で君の力を借りたいのは、今日の午後の四時頃に顔を隠して、その蓮池の畔へ行つて貰らいたいのだ、そして秀の歸りを待受けて、嫌な事を言ふて因縁をつけ

て貰らいたいのだ、つまり狼藉だね」

文吉「狼藉はなんぢや」

小山「マア早く言へば手込めにして貰らいたいのだ」

文吉「堪忍してくれ、人の娘にそんな事をする位なら此の年迄一人身で暮らさんわ、仕様もない噂でも持てるわえ、俺は女は嫌ひぢや、面倒臭くて油臭くてな、一生一人身で暮すつもりぢや、そんな事が、ヒヨット知れて見い懲役ぢやがな」

小山「何にも真剣に口説くぢやないよ、一寸姉さん其處迄送りませうかご、活動へでも行きませうかごか嫌やがらせを言ふのぢや、スルトお秀が逃げ廻るのを、オイ何んごか返事を知ろご言つて追ひ廻すだらう、其處へ其の福井さんご言ふ人が飛び出して横面をボンご殴るのだ」

又吉「俺れが先きの横面を殴るのか」

小山「イーヤ、君が殴られるのよ」

文吉「フウン其れから」

小山「君は吃驚したご言ふ寸法で、雲を霞に逃けて呉れたらよいのぢや、お秀が其の恩に感じて其の人を慕ふわ、理想の労働者のなりだわ、其處へ僕が行つて甘く妹を説いて此の縁談を纏めるごいふのだ」

文吉「俺れは悪い役廻りぢやな」

小山「其の代り此の縁談が調ふて、お秀さへ嫁にやればキットお久は呼び戻すよ」

文吉「ヨシ引受けた、お久はんさへ内へ入れて呉れるなら、一番やつて見る」

小山「其の代り甘く事が運んだら、君も只では捨て置かないよ、五十圓位の御禮はする」

文吉「イヤそんなものは入らん欲徳づくで出来る仕事やないよつてなア、併し其の福井たら云ふ人に、餘んまり手荒い事をせぬ様に頼んで置いてや」

小山「アハ、大丈夫だよ、君酒が覺めたねえ」

文吉「泣いたり感心したりして、素面になつた」

小山「ごうだいウキスキーでも上げようか」

文吉「イヤ今の仕事の有る内は氣になつて酔えんわ、四時言ふても間が無いよつて、ボツ／＼仕事に掛るわ」

ト椅子を離れながら着物の前を合す。

小山「夫れぢや濟まないけれぢやつてくれ、そうして翌日でも知ら無い顔で来てくれ玉へ、御馳走するから」

文吉「俺れに御馳走は入らんけれぢ、斯う話が極まつたら、今の後妻を放り出してくれや」

小山「彼れは後妻ぢやない妾だよ」

文吉「ア、夫れを聞いて安神した」

ト此の時おまきは上手より艶めかしき風呂上りの拵へにて、一寸立聞きをなし居る、小山は立上つて正面のベルを押す、石井いで來り、

石井「ハア御用で」

小山「お客様が御歸りだよ」

石井「お客様は」

小山「此の御方だ」

石井「此奴ですか」

文吉「此奴は何んぢや」

石井「言つたら何うした」

小山「コラツ馬鹿、失禮な事を言ふな我輩の大切なる親友だ、無禮な事を言つたら承知せんぞ」

石井「ハッ」

ト丁寧ていねいに頭あたまを下さげる、

文吉「鶴つるの一こゑト聲こゑえらいもんやな、チイ之これを取とつさけ」

ト以前いぜんの壹圓えん札さつをテ一さブルより取とつて石井いしに與あたへる。

石井「ハツ有あり難がたう」

小山「イヨウ馬鹿ばかに氣きまへがいゝな」

文吉「人ひとの禪ぜんやがな、アハ、、、」

ト好人物かうじんぶつらしく石井いしに連つれられて、揚やう々として元もとの處ところへ這はい入る、おまきは此この時とき小山こやまの前まへに來りて、小山こやまの胸むね倉ぐらを取り、

おまき「口惜くちやくしい」

ト大聲おほこゑ出して泣なく、

小山「ア一びつくり吃驚おどろした、チイ馬鹿ばかな眞似まねをするな」

おまき「貴方あなたは妾めかけを追おひ出すのでせう」

小山「ナゼ、お前まへを追おひ出すものかね」

おまき「嘘うそ仰おつしや在い、今いまの變へんな男おとこに然さう仰おつしや在いつたちやおまへんか」

小山「貴様きさま聞いて居ゐたのか」

おまき「エ、皆みな聞いてました、追おひ出すなら追おひ出す様やうにして貰もらひませう」

小山「嘘うそだよ、あの男おとこは少々せうくう薄馬鹿うすばかだから、妹いもうとの縁談えんだんを調しらへる玉たまに使つかつたのだよ、チイお前まへだつて妹いもうとの居ゐない方が宜よろからさ」

おまき「それはそうだすわ、あんな仙人せんじん見みたいなお秀ひでさんと一緒に暮くらして居ゐたら寢ね酒さけでも不味まずいわいな」

小山「夫それ見みよ、皆みななお前まへの爲ために苦勞くろうして居ゐるのぢや」

おまき「追出おくだすと言いふのは嘘うそだんかう」

小山「俺おれの命いのちの有ある内うちは、お前まへは傍そばを放はなさないよ……」

トおまきの肩かたをなでる、おまきは嬉氣うれしげに小山こやまの膝ひざへよりかゝる、此この時とき倅せがれ貞まこと之助のすけ十七

年位の青年金縁目鏡流行の帽子洋杖を持ち、巻蓑をクニラしながら半玉友葉仲居おかつを連れていで来る。

貞之助 「お父さん、只今」

ト横柄にはいる、おまきは見てブンとふくれて上手の安樂椅子へ行く、

小山 「貴様昨日から今頃迄何處へ行つて居た」

ト半玉仲居を見て、

「一所に來て居る者はなんだ」

貞之助 「何んだこ、見て判りませんか、今福原で一流の舞子友葉です、將來よろしく」

小山 「何にが將來宜しくだ、廓の人間を内へ連れて歸る奴が有るか、馬鹿奴ツ」
友葉 「坊チ私し歸るわ」

ト體裁惡氣に言ふ。

貞之助 「構はんく、俺れの内だく、サア此の椅子へかけたらいゝんだ」

ト椅子を進めながら、

「爺は怒つても僕が可愛いのだから、ごうも仕やしない、チやおかつお前も

おかけ」

おかつ 「坊ンチャン、お父さんにそんな仰在るもんぢや御座りません」

ト小山に向ひ追従らしく笑ひ、

「へ、、旦那様、今日は毎度防ンチに御ヒイキになつて居ります、福原の一すしで御座ります、チト貴方様もお遊びに來て下さりませ、一寸防チを送つて參りましたので」

小山 「君々こんな子供だから餘まり遊ばして呉れては困るよ」

おかつ 「宅でも心配して居りますが何分かうご仰在いましたら御聞入れがない方で困つて居ります」

ト貞之助に向ひ、

「ネエ坊さん、餘んまりしけくお出で遊ばしますな、お父さんが御心配で御座ります」

貞之助 「何に構うもんかい、お父さんも此の通りやつているのや、親の眞似を子とするのが不審が有るか、一日でも顔を見せてやらねば友葉が心配をするがな」

ト友葉に向ひ艶めかしく、

なア友葉」

おまき 「ア、末恐ろしい餓鬼やな」

貞之助 「ゆふてなや、おばはん……」

おまき 「おばはんごは何んや……」

貞之助 「おばはんやがな、お前に姉さんもお母アはんごも言へるかいな、末恐ろしいでもホトイてくれ、今の間に使ふて置いて大人に成つたらチャト極まるのぢや」

や、内の親父さん見たいに頭禿がしてから大事なくお母さんを放り出して、お前見たいなア者を引張り込むようでは、實に父の前途が思ひやられる、父上以て如何ぞす」

小山 「馬鹿、親に向つて何んご言ふ事を言ふのだ、毎日學校も行かずに我が子ながら愛相がつきすよ」

貞之助 「此方も我が親ながら愛相がつきる、あんな者が内で大きな顔をして居られでは、眞面目に勉強も出来るものか、矢ッ張り前のお母さんが内に居て、可愛がつてくれてこそ勉強が出来るのや、お父さん前の御母アチャンを」

トテロく泣き聲を出して、

「呼び戻していな、夕晩もお母アチャンが泣いて居る夢を見た、お母アチャンさへ戻つてくれたら、僕も品行改めて一生懸命に勉強する、ナアお父さん僕お母アチャンに會ひこうなつた」

トジツト思入小山は惑極まる科にて卓へ俯向く、

おまき 「フン……其ないに前のお母さんが戀しけりや、此の家を出て行きやがれ」

貞之助 「馬鹿、之れは俺れの家ぢや、出て行くなら己れが出て行け、元のバーへ
行つて十番さんビールにビフテキこぬかして居るのが分相應ぢやい」

おまき 「一寸旦那はん聞きなはつたか今の言草を、何んの事は無い不良少年やがな
あんな者を内に置いておいたら小山家の名譽に掛かはります、サア今から放り出
しておくなはれ、サモなければ私がヨウ辛抱しまへん、私が出て行きますく」

小山 「ヨシ出て行け……」

おまき 「放り出させうか」

小山 「貞之助ぢやない、氣に入らねばお前が出て行け」

おまき 「エツ……」

小山 「矢ッ張り俺れは子が可愛い」

ト惑極まつて言ふ。

貞之助 「父上感心」

小山 「馬鹿ッ」

ト頭を両手で抱へ、

「噫、俺れは頭が亂れて來た」

おまき 「エ、口惜しい」

ト卓上のコーヒー茶碗を投げつける、木頭、貞之助は椅子の上に昇りてハンカチーフ
を振りながら、

貞之助 「小山家萬歳」

ト叫ぶ小山は俯向きしまゝ無言、おまきは泣き叫ぶ、友葉おかつはハラ／＼として困
じ居る體にて道具一轉する。

(2) 諏訪山公園の四阿家の場

本舞臺平舞臺一面諏訪山公園を見たる背景、中央に大なる四阿家、夫れに續いて草花の搦みたる四ツ目垣、處々に西洋花、下手に自働電話室、上手に一間半程の蓮池、五寸高の丸土堤には蓮の咲たるを見せる、後に此の池に人の落ちる様切穴を開け置く、總て諏訪山公園の場面、詠への囃子にて道具納る。

ト四阿の中に以前の福井、穢なき労働服を着て労働者の風にて新聞を読み居る、下手より園丁撒水器を持つて出来る之れを福井は見えて、

福井「ライ君々」

ト呼びながら腹掛より金側時計を出し撒水夫の傍へ來り、

「何時だね」

園丁「今は三時二十五分です」

トニツケルの時計を見て言ふ。

福井「有り難ふ」

園丁「ヤッお前金時計じゃなア」

福井「僕が金時計を持つたら不思議か」

園丁「労働者が金時計」

ト小首をかたげながら、

「御用心〜」

ト言いながらはいる。

福井「アハ、此の服装で金時計は成程おかしい、不思議がるわえ」

ト此の時上手より貰賣いで來る、之れを見て、

「ライ貰屋々々」

貰屋「へエー」

福井「エムシーが有るかへ」

苺屋「そんな苺はおまへん」

福井「スリーカツスルが無いか」

苺屋「なんだす夫れは」

福井「エジプトの苺だ」

苺屋「おまへんで」

福井「困つたねへ何が有る」

苺屋「敷島、朝日、大和」

福井「そんな苺は吸へないねへ、十本一圓位ひの苺は持つららんか」

苺屋「お前人間が一寸たらんなア」

福井「何にがたらんのぢや」

苺屋「お前等巻苺を呑む柄かへ、翳ぶりやがつたら蹴飛すぞへ、マツチ苺々……」

ト賣聲うりこゑをしながら下手しもてへはいる。

福井「驚いたねへ蹴飛す役が蹴飛されて堪るものかい、成程人は服装だね」

ト感心かんしんして居る處ところへ上手かみてより樋口彌之助折靴ひぐちのすけをりかはんもを持ち株式屋かぶしきやの扱こしらへにて出來いでり、福井ふくいの前まへを通とほりすぞす、福井ふくいは見て、

福井「チイ〜樋口〜」

樋口「なんぢや失敬な樋口なんて、貴様何處の奴ぢや」

福井「チイ〜怒るな、〜、僕だよ〜」

ト傍そばへ出でて行く、

樋口「アツ、福井の旦那、一體何んぞ言ふなりです……」

福井「チイ〜人に聞へるがな、チイ人に言ふなよ、チト秘密ひみつが有つて此んななりをして居るのぢや」

樋口「ハアン何處の園遊會えんゆうかいの變裝競争へんさうきょうそうですか」

福井「マア何んでも宜い、貰を一本くれないか」

樋口「サア何卒ナリエントだすせ」

福井「ア、結構々々」

樋口「何んと言ふても金の有る御方の御遊びは違ひますなア、お楽しみな事で」

福井「餘り楽しみでもないよ、随分苦しいよ」

樋口「苦しみの中の楽しみで、チ、お楽しみ言へば何時かのお話の小山の嬢さんの御縁談ごうなりましたね」

福井「實は其の縁談を纏める爲に、此の苦しみをして居るのだ、相手の嬢ごゆふのは金持が嫌で労働者が好きと言ふので、今日此處で此の變装をして言はゞ見合だ」

樋口「これは奮つてますなア、先方から其なりでこい言ひますのですか」

福井「未だ夫れ丈けぢやないよ、先刻先方から電話が掛つて奮つた事を言ふて來

るぢやないか、或る人間に言い含めて其の娘に態ご狼藉をやらすから、其處へ僕が出て其の人間を懲らしてやる、其の恩に感じて先の娘から惚れさす言ふ用意周到な見合だろ」

樋口「成程之れは貴方ぢやないご出來ませんな、場所は何處です」

福井「此處だよ」

樋口「時間は」

福井「今日の午後四時だ」

樋口「モウ初まりますな」

福井「芝居見たいに言ふなアよ」

樋口「之れは面白い別に用も御座いませんから、此處で立見をして行きませうか」

福井「馬鹿な事を言つては不可ないよ、君が見て居られては、やりにくいぢやな

いか、早く彼方へ行き玉へ……」

樋口「成程種を知つた私が傍に居ましては立役者もトチリますなア、宜しい粹を利かして歸りますが其變り一度散財にねへ」

福井「ぬからぬ男だね、サア貰代だ」

ト紙幣を出す。

樋口「へい、有り難ふ御座います、チ、旦那草鞋の紐が」

福井「ヤア之れは恐縮」

ト樋口は草鞋の紐を結んで居る、處へ先の貰賣下手より來りて、此の様子を見て居る
兩人心附ず、

樋口「旦那餘りしめるに痛い事おまへんか」

福井「大丈夫く」

貰屋「モシ旦那は之れはなんです」

ト尋ねる二人は吃驚して、

樋口「ア、吃驚した、此のお方は……」

福井「コレツ」

ト目で知らず、樋口は氣をかへて、

樋口「チイ芳公働らけよ……」

福井「ラツトシヨ……」

貰屋「貰にマツチは如何」

ト三名よろしく氣味合にて樋口は下手貰屋は上手へ這入る、福井は時計を出して見て

福井「チャモウ三時半だ、小山は何にをして居るのだらう、チャ電話で聞いて見よう」

ト下手の自働電話室へ這入つた、入違ひに上手より以前の貞之助、友葉、おかつの三人いで来る。

貞之助 「チイ今日は山の常磐へ行かうな」

友葉 「あたしは何んだか心配よ」

貞之助 「何にが心配だ」

友葉 「だつてお父さんにあんな事仰在やるんですもの、何んだかお父様が氣の毒よ」

おかつ 「夫れに又お金を百圓持つて入らしつたのでせう、如何に商賣でも冥加が惡いわ、今日は坊ンチ歸りませう」

貞之助 「嫌やく／＼俺れが使はいでも、何うせあの妾が使ふのぢやないか」

友葉 「だつて先刻モウお暇を出した様ですよ」

貞之助 「お父ぢの惚氣が判るものかい、サア／＼行かう／＼」

ト捨ぜりふにて行きかける、上手より刑事小西出来る。

小西 「チイ／＼一寸待て／＼」

貞之助 「僕ですか」

小西 「そうぢや」

貞之助 「何か用ですか」

小西 「僕は相生橋署の刑事だが、一寸警察まで来い」

貞之助 「エ、何んで行きますのや」

トヲロ／＼する。

小西 「何んでもよいお前は福原の友葉と言ふのだなア」

友葉 「ハイ……」

小西 「お前は、一すじの女中だね」

おかつ 「ハイ……」

小西 「誠に氣の毒ぢやが、此の少年はチト舉動不審なので、此の間から警察署で目を附けて居るのだ、少し取調べたいから警察迄同行して呉れ」

貞之助 「イエ私は怪しい者やおまへん、海岸通りの小山の悴で……」

小西 「言ふ事が有れば警察で言へ」

ト手を取りて同行せんとする、貞之助は「ロロ」と半泣になる、小西は同行せんとする、折柄お久いで来りて此の様子を見て驚き、

お久 「チ、貞之助やないか」

貞之助 「ア、お母さん」

ト聲を上げて泣く、

小西 「僕は相生署の刑事だが、貴方は何んですか」

お久 「ハイ之れの母で御座ります」

小西 「母云ふ之れは何處の子です」

お久 「ハイ海岸通り二丁目の鐵商小山平助の長男で貞之助と言ふ者で御座ります」

小西 「ハアン鐵屋の小山は成金ぢやねえ、貴方は其の奥さんですか」

お久 「ハイ只今は一寸家を出て居りますので」

小西 「答辯が曖昧だね、實は此の子は年に似合ない花流界に足を入れて盛に金をまき散らすので、舉動不審として本署の命令に依つて取調べる必要が有る、幸ひだから貴方も共に来て下さい」

お久 「エ、あの私も……」

小西 「職權で是非連れて行きます」

お久 「致方御座りません、御供致します」

ト貞之助の頭をなげながら、

「コレ貞ちゃんお前暫らくの内に情けない子になつてくれたな」

貞之助 「デモあんな妾が来て酷めるもの、お母ちゃんは居てくれんし、僕金でも使はにや我慢が出来んがな」

小西「ハア、餘程家庭が入り込んで居る様ですな」

お久「ハイ……」

ト袖で顔を押しながら、

「皆家庭の罪で御座ります」

小西「御迷惑でも来て下さい」

ト友葉おかつに向ひ、

「お前方も同行せい」

友葉「ハイ〜」

お久「貴方様御氣の毒で御座いますなア」

おかつ「ごう致しまして」

貞之助「お母アチャン、警察で誤つてや」

ト縫子附いて泣く、お久も堪へ兼ねて貞之助を抱きしめ、

お久「これから品行を改めなされや……」

貞之助「其の代りお母アチャンの傍へおいこいてや」

ト之れにて不思議顔を摺り付けて泣く、刑事とホット顔見合せて氣を變へ、

お久「まだ矢張り子供で御座りますヲホ、」

ト泣き笑ひして、

「夫れではお供をいたします」

ト五人は花道へ行く、貞之助お久はシホ〜しながら附いて行く、此の以前より小山平助は上手より出て、木蔭にて此様子を見て居リツカ〜と皆々這入たる方を見ながら前へ出て無言の儘悔悟の科する、此の時電話室より福井いで來り、

福井「ヤツ小山君ですか」

小山「ヲ、福井さんですか」

福井「あんまり御出が遅いから今お宅へ電話で伺ひましたら、御出ましになつた

「聞きましたが、丁度入れ違ひでしたな、さうです御覽下さい立派な労働者でせう」

小山「甘く出来ましたねえ」

ト福井が見せる姿を見ながら氣の無い返事。

福井「なんだか氣の無い返事ですなア、之れなら秀さんが振り附くでせう」

ト考へ居る小山を見て、

「何を考へて居るのです」小山さん直ぐに假祝言だけねえ僕の裏長家を一軒明けさしましたから、夫れが自分の家だと言つて秀さんを同道する様にしてあります」

小山「そうなれば右の問題もねえ」

福井「三萬圓ですか、手形でチャント持つて居ますよ」

ト懐から一寸見せる。

小山「有り難う」

ト考へて、

「何ぜ俺れは浮世の執着が立ち切れないのであらう」
トジツト向ふを見て一人言を云ふ。

福井「夫れは僕だつてさうです、秀さんが思ひ切れないと同じでねえ」

小山「之れを機會に家庭一變だ」

福井「僕も圓滿なる家庭を作ります」

小山「其の犠牲になる妹は可愛そうだな……」

福井「ナゼ秀さんは可愛そうです」

小山「エ、イエナニ可愛がつてやつて下さいと言ふのですよ」

福井「へエ——無論ですよ」

ト此の時下手より文吉帽子を眞深に冠むりヌート出る。

文吉「チイ平さん……」

小山「誰だ」

文吉「俺れや……」

小山「ヲ、文さんか」

文吉「時間が来たよつてやつて来たぜ」

小山「御苦勞だつたねえ」

福井「小山さんあれは何んです」

小山「先刻電話で申上げた妹に狼藉をして呉れる人です」

福井「イヤ夫れは御苦勞だねえ」

文吉「平さんあのお方は先刻お前ここで逢ふた人やな」

小山「そうだ秀の婚さんに成る人だ」

文吉「えらい汚ない旦那やな」

福井「秀さんの理想だご聞いてから、態さかう云ふなりをして居るのだ、君甘くやつて呉よ」

文吉「俺れは大丈夫ぢやが、お前さん調子に乗つてあんなまりボン／＼毆つてなや」

福井「大丈夫／＼其の代り後で禮をするよ」

文吉「イヤ其の禮は平さんお久さんを戻してや」

小山「文さん有り難う、あれを呼び戻して今迄苦勞をさした恩返しに立派に奥様ご言つて暮さすから、君からお久へ宜しく誤まつて下さい」

文吉「ア、お久はんに聞かしたいな」

ト此時福井は上手を見て、

福井「ヤツ来た／＼」

ト之れにて三人は一寸慌てたる科にて宜しく示し合ひ、福井は自働電話室へはいり、

小山は上手木蔭に忍ぶ、文吉は帽子を深く冠つて待受ける。上手より裁縫返りの以前
のなりにていで来る、文吉は傍へ行き、

文吉「姉はん送つたらうか」

ト云ふ、お秀氣味悪氣に退かんとす、文吉は袖を捕へて、

「タイ人に物言はして何んごかぬかさぬかい」

お秀「御免下さいねえ」

文吉「何にを御免ぢや、サア俺れの行く處へい」

ト手を取り行く、

お秀「アレー……」

ト逃げかける、文吉は電話室の方を見て福井に早く出よと目配する、福井はマゴク
して居る、文吉はイラ／＼しながらお秀の手を取たる儘連れ行かんとする。

お秀「アレー……」

ト一聲大聲にて叫ぶ、此の時上手より松岡いで来り、矢庭に文吉を捕へてお秀の顔を
見て、

松岡「チャ秀さんですか」

お秀「助けて下さい」

ト文吉は逃げんとするお秀を追ひかけるを、松岡は振り放し、文吉を前の蓮池へ投げ
込む、福井は此の様子を見て電話室の硝子扉をしめて中より堅く握る、お秀は松岡に
縋る双方氣味合。

松岡「ヲ、秀さん」

お秀「要さん御機嫌よろしう」

松岡「貴女ごうなすつたのです」

お秀「今お稽古の歸りに此處を通りますご、今の變な男がね、あんな亂暴をした
のです、私し生きた心地は有りませんでしたわ」

松岡「未だ日も暮れないのに、大膽な出齒龜ねえ」

お秀「貴下御怪我は御座いませんでしたか」

松岡「ナニ僕は大丈夫、貴女は」

お秀「ハイお蔭で何處も怪我は致しません、が今の奴は此の池の中で死んで居ますまいか」

松岡「ナニ大丈夫です、浅い池です、泥でも呑んで上つて来るでせう」

お秀「上がつて来るご大變ですから早く行きませうよ」

松岡「其れぢや其の邊迄一所に行きませう」

お秀「ハイ有り難う御座います」

と嬉し氣に落ちたる風呂敷包を拾ろひ、文吉の落したる貫入と共に拾つて、

「貴方こんなものが落ちてますよ」

松岡「今の悪漢の所持品でせう、後日の證據に拾つて置きませう、サア入らつし

やい

トお秀の手を取りハット思入有つて双方離れる、互に目顔で耻しそふに笑ひながら肩を並べて花道へはいる、木蔭より小山平助ツカ〜といで來りて二入の後姿を見て無限の思入、福井は電話室よりツカ〜と出て、

福井「小山さん〜」

ト言いつゝ小山の傍へ寄る、小山無言。

「小山さんあれはなんです」

小山「あれは將來を誓つた秀の夫です」

福井「夫れでは僕はごうなります、〜」

小山「貴方ごの結婚は破約致します」

福井「エ、」

ト驚き急に懷中より三萬圓の小切手を出し、ジリ〜振へながら小山の前へ突きつけ

「夫れでは約束の三萬圓は御用達は致しませんよ」

小山「入りません、親子兄弟夫婦の愛情には代へられません」

トキツパリ言ふ、木頭福井は尻餅をつく、文吉は泥鼠のなりで蓮池より上り来りて、

文吉「平さん酷い目に合したで」

ト福井は文吉を見て無言で頭を下げる、體にて詛への囃子にて、

滿
來

時
の
縁
【二場】

時の縁

櫻田家庭前の場

登場人名

城	主	酒井和泉守安正	五郎	【俳優】
酒井の臣	櫻田源吾	五郎		
同 茶道	淺野生觀老	五郎		
櫻田の臣	田中平馬	致雄		
同 小性	坂井金彌	蝶太郎		
同 老僕	奎兵衛	蝶七		
同 門番	吉兵衛	蝶八		
同 足輕	佐平			
同	又平			
同	吾平			

同	常平	大磯
酒井家奥方	お静の方	大磯
同 家腰元	若葉	三二郎
同	五月	林蝶
侍 女	小百合	胡蝶
同 家臣	谷川一馬	三郎

櫻田家庭前の場

本舞臺高二重廻り縁付正面上手一間の床の間に三幅對の軸をかけ、大なる花瓶に老松を生けて有る、續いて書院欄に蒔繪の手文庫を置き巻物三本飾り、其の下に蒔繪の碁盤同石を置き有る、其の下手は御殿襖に墨畫を書きたる上品なる物、火鉢、御殿蓆盆、經息、刀掛何れも蒔繪の物、銀煙管を出し置き錦の褥茵を中央に敷き、其

時の縁

の上下は落間、一面奥庭の背景中央に櫻の大樹満開の體、下手に白布を二枚敷き總て櫻田家庭先の模様、誂への囃子にて幕明く。

ト谷川一馬、侍女小百合の兩人は、下手白布の上に兩人共白衣にて切腹姿にて座し居る、其の後方に足輕四人六尺棒を持って立ち居る、上手に櫻田の臣田口平馬上下にて検見の役にて高相足に腰を掛け居る處へ、老僕李兵衛切手桶を持ちいで來り、平馬の前に置き下手の二人を見て、

李兵衛「テ、御二人共、モウ切腹の場所へ御直りて御座りますかいなア」

一馬「李兵衛殿、當櫻田家へ御預け成りし我々兩人、言はゞ劔の中の當家にて御身一人は色々御氣附けられた御親切、今果つる身の谷川一馬」

小百合「縁につながる腰元小百合」

一馬「嬉しいぞよ、共々に御禮を申し」

二人「上げまする……」

李兵衛「何んの御禮に及びませう、併し如何に君命なればこそ、花の盛りの御二人を、ムザく散らす勞はしさ、御氣の毒に存じます」

平馬「ヤイ、爺氣の毒なごは、何が氣の毒な堅い御家の御掟を破り不義働きし彼等兩人、打ち首にもなるべき處、上様の御情けにて當家へ預けられたるさへ有るに切腹仰せ附けられたは一馬が面目、小百合こそ同じ薙で自害まで許されし果報者、氣の毒所か仕合者の彼等兩人、有り難く心得て早くくたばれ」

李兵衛「モシ……平馬様、貴方も櫻田様の御用人じや、くたばれなんて侍らしくない事を仰在らずに、心靜に臨終あれと言へませんか」

平馬「言ふな彼等は、くたばれで澤山じやはえ」

李兵衛「ア、左様へ御座りますか、モシ谷川様小百合様御心靜に御くたばり遊せ」
一馬「テ、嬉しいぞ、切腹仰附けられしは武士の本懐、何に思ひ残す事が御座らうぞ」

小百合 「思ふお方共々に死んで行く身の果報者、嬉しう思ふて死にまする」

奎兵衛 「ア、あの様に言はれたら一馬様も本望じや、モシ平馬様、貴方あんな事を

女御から言ふて貰らうた覺へが御座りますかいな」

平馬 「言ふな奎兵衛、不肖ながら田口平馬、女の口からあの様な穢れた言葉は」

奎兵衛 「聞くのは嫌で御座りますか」

平馬 「嫌やじやないわい、言ふて呉れてが無いのぢやわい」

奎兵衛 「アハ、矢張り内のお殿様ミチヨボ、、じやがな」

佐平 「奎兵衛ミ内の殿様ミチヨボ、、こは」

足輕 「何んぢやな……」

奎兵衛 「お前方譯を知らんから、此處の旦那様が、小百合殿に、ホの字ミレの字ぢや

がな」

足輕 「ヲ、其れは家中で評判じや、くくく」

平馬 「ヤイ、静に致せ、奥へ聞へたら何んにする」

ト此の時正面奥にて櫻田源吾、

源吾 「イヤ何にもかも聞いて居るぞよ」

ト此聲にて皆々顔を見合す、源吾は羽織袴にて出来り中央に立つ、小性坂井金彌太刀持つて共に出来り、刀掛に太刀を掛けて褥茵を敷く、源吾は其れに座す、金彌は其の後に居住ふ。

平馬 「ヤイ足輕めら、夫れへ出よ、入らざる取り沙汰、殿様のお耳へ入れた慮外者、サア今一度言つて見よ、主君に代つて田口平馬、其の分では差し置かぬぞ」

ト刀に手を掛けて意氣込む。

源吾 「コリヤ叱るな、く、人の口には戸はたてられぬわえ」

平馬 「仰せでは御座りますれど、彼れ小百合風情に殿様が戀ひ遊ばす杯は、以ての外、左様な覺は」

源 吾 「慥に有る」

平 馬 「ヤア御座りますのかいなア」

源 吾 「有つたが不思議か、男ぢや者、あの小百合めには恥しながら戀の玉章、何十本渡しても返事もよこさぬ不埒者、能くも恥辱を與へたなア」

奎兵衛 「夫れは御殿様貴方の愚痴ぢや、小百合殿には一馬云ふ心の戀人が御座りますがな」

源 吾 「サア惚れる相手に事かへて、何處が宜ふて一馬づれに戀したやら、當時酒井家で羽振の宜き此の源吾、殊更殿が御好みの圍碁の相手は拙者に限る君臣の隔てもなく戀ひ慕はるゝ碁敵ミ、明けても源吾、暮れても源吾、今は家中の老職さへ席を譲る拙者の威勢、其れを振り捨てた天罰は、戀の敵の身が刀で、首はねられる大馬鹿者、其の上不義の艶書迄、人も有らうに某に拾はれたのは、小氣味の宜い天の配劑だ、ハ、ハ、ハ、」

奎兵衛 「ヘイ……御殿様がお拾ひなされたので御座りますか」

源 吾 「サア何んでも臭ひと思つたから、様子を狙ふ拙者の目に留まつて拾ふた不義の秘書、夫れが証據で御成敗、江戸の敵は長崎で打たれる首も拙者の刃、我が家へ己等を預けられしは粹な捌きの御前様、戀の意根を晴せの謎だ、今日暮れ六ツの鐘を合圖に腹切らせよこの御上意だ、モウ入り相迄半時たらず、刻々迫る己等の命、怨みの劔で素首をはねる、覺悟を極めて待つて居れ」

一 馬 「ヤア卑怯者の櫻田源吾、叶はぬ戀の意趣晴らしに、拾はれたる戀の玉章、武士の情けを忘れはて、公にした憎き其の方、君の馬前で死ぬる身を戀路の爲に捨てさせる、恨みは死すこも忘れはせじ、寝られぬ夜半の目覺には、一馬が恨みを覺へて居れ」

小百合 「一馬様許して下さい、夫れも妾が徒らから、申譯けが御座りませぬ」

一 馬 「其の徒は相ひ互ひ、責めて源吾が見る前で手を引連れて死出の旅路にする

身は戀の花じやわい

小百合 「未來は天下晴れての夫婦」

一馬 「三途の河も手を引いて」

小百合 「必ず見捨て、下さんすなへ」

平馬 「ア、ア羨やましい事で御座るのふ」

源吾 「馬鹿者めツ、引かれ者の小歌を聞いて羨やましいとは何事だ」

空兵衛 「デモ御殿様花の様な若い二人が番ひ離れぬ胡蝶の様に、今の有様を見せられては、白髪頭の私しでも昔思へば羨やましい」

源吾 「チ、羽根の取れた番ひ蝶、露の命の捨て處、イデヤ息の根止めて呉れよふ」
ト太刀に手をかける、

空兵衛 「アイヤモシ御殿様、御兩人の御成敗は暮れ六ツの御上意で御座りまする」

源吾 「ウム」

空兵衛 「未だ入相の鐘もならぬ内に御成敗なされましては、君の御掟に反く御咎め急いては事を仕損ぢる、マア、御静かに〜」

源吾 「デモ春の日永の待ち遠い、ア、入相の遅い事ぢやなア」
ト此の時上手より小性ツカ〜といで來り、

金彌 「ハア、お殿様へ申上げ升」

源吾 「何事じや」

金彌 「只今御城内より奥方お静の方様、お忍びの御成で御座りますこと、御女關へ御乗物がつきました」

源吾 「ナニ奥方様が忍びの御成りとは、ハテナ」
ト一寸考へて、

平馬 「何にもせよ、其の方共は女關へ御出向ひ致せ」
空兵衛 「ハイ畏まりました御座ります」

源 吾 「拙者も衣服を改めて、御出向ひ致さにやならぬわへ」
李兵衛 「そうして此の御二人は」

ト一馬小百合を指す、

源 吾 「生き恥晒す彼等兩人、時刻の來る迄生き恥晒らさして置け」

平 馬 「然らば我等は御出向ひ」

源 吾 「テ、早く參れ」

皆々 「ハア……………」

ト平馬は上手へ、李兵衛足輕四人は下手へ這入る、源吾立ち上り思入有つて、

源 吾 「ハテ思ひも依らぬ忍びの御成り、ハテ何事でも有らうなア」

ト此の時一馬小百合の兩人、立上りかける、源吾は見て、

「ヤイ、何處へ行くのだ」

一 馬 「まだ暮れ六ツ迄時刻もある、此の姿も奥方様に御目に掛ける恥しさ、情け

に暫しあの木蔭に」

源 吾 「イ、ヤならぬ、生恥ぢ晒らすは心からだ、上意を受けた櫻田源吾、其處一寸も立たせぬぞ」

小百合 「これいナア一馬様、恥かしけれご今際のきわに奥方様に逢へる嬉しさ、此處に居たが宜いわいなア」

ト一馬の袖を取つて坐わらせる、一馬はうなづきながら元へ座す、

源 吾 「何れは恥の掻きついで、ジタバタ致さず夫れに居れ、金彌上下を持て」

ト此の奥より、

静の方 「イヤ略服にて苦しくない」其の儘」

ト此の聲にて源吾、金彌の兩人下手に平伏する、詠への唄になり平馬の案内にてお静の方腰元若葉、五月の兩人付添ひいで來る。

平 馬 「ハア、奥方様御成りで御座ります」

源 吾「ハア之れはく思ひがけなき御成にて略服の儘の御出向ひ、飛んだ失禮御許しなされて下さりませ」

静の方「イエく妾こそ先ぶれもなく俄の訪れ、嘸や迷惑で有らうのふ」

源 吾「コハ恐れ入り奉る、御召しこあらば直に登城仕るに、斯かる荒家へ直き直きの御成こは、櫻田が家の面目」

ト金彌、平馬の兩人に向ひ、

「コリヤお茶の用意を致せ」

平馬 金彌「ハア……」

と兩人一禮して上手へ這入る、お静の方は小百合一馬の方を見て、

静の方「谷川一馬か」

一馬「奥方様……」

静の方「小百合も共にか」

小百合「お恥しう存じます」

若葉「古い馴染の小百合さの」

五月「死に装束の其のお姿」

若葉「御悼しう」

二人「存じます……」

源 吾「其れも彼等が心から掟を破る大罪人、同じ薙で相果てるは、まだしも上の御慈悲で御座る」

静の方「今日暮れ六ツが最期ぢやなア」

一馬「ハツ……奥方様にも」

小百合「御健壯にて」

静の方「あたら名家に産れながら、不義言ふ名に散る命、さても不憫な者じやのふ」

源吾「不憚な者この御言葉は、若しや彼等兩人を御助命遊ばす御心で御座りまするか」

静の方「黙れ櫻田、不肖ながら酒井和泉が妻なるぞ、如何に功臣名門の家に産れし者たり共、掟を破りし罪人を助けて家中の示しが出来るか、我夫様も御内心は助けたいと思召しても、動がぬ家の掟は掟、忠義を誇る汝にも似合ぬ事を言やるのふ」

源吾「ハアツ恐入つて御座ります、其れで俄の御成ごは」

静の方「左ればいのふ、子供の内から使ふた小百合、見目よふ産れたが不幸せに、引手数多の一家中、中にも一人不埒者は振り袖へ戀の附文み、其の度毎に小百合から泣いて妾に渡した玉章、其れを一々洗ひ立ては何處へ飛火が仕様やら」

ト静の方懐中より手紙を出して一寸源吾に見せる。

源吾「ヤツ……」

ト驚く、

静の方「危ない事と思へばこそ、今迄妾の胸に秘め預かつて有る、此の附け文も小百合が死ねば夢の跡、寢覺の悪い文からは、小百合に返しに來たのちやわいのふ」

源吾「イヤ不埒な奴も御座りますなア」

若葉「小百合様に文付けたは」

五月「一體何處の何方で」

二人「御座りまする」

静の方「サア狂へる駒このゆふ隠くし名、併も筆蹟は同じ事、止めて止らぬ煩惱の狂へる駒を繼ぐ木は慥に櫻」

源吾「アツ」

静の方「ア、吃驚りの仕様わいなア、チホ、、、、」

ト此の時門番吉兵衛花道よりいで來り、七三にて伏し、

吉兵衛「ハア申上げます」

源 吾「ヤア慮外なり又者の身を以て、何事ぢや奥方様の御前ぢやぞ」

静の方「イエ〜苦しい、忍びの身ぢや」

源 吾「ハアツ、何事ぢや」

吉兵衛「ハア只今御城主様御忍びにて裏門口より御成で御座ります」

静の方「何に我が夫様が御成りな」

源 吾「思ひがけない俄の御成り、只今御出向ひに申上げよ」

吉兵衛「ハツ……」

ト再び揚幕へ引返す。

源 吾「ハテ何の御用上様が裏門口より御成りなされたので御座りませうなア」

静の方「何にもせよ妾も忍び、御許も無き外出の御叱り、コレ源吾妾を暫時隠くして

たも」

源 吾「ハア汚穢しう共次の一間へ」

静の方「必ず御前に内々でのふ」

源 吾「其の代りには只今の狂へる駒も内々に」

静の方「チ、情は相身互ひじやわいのふ」

ト源吾の前へ手紙をボンと投げる、源吾嬉しげにピリ〜と破る、一馬はジツト其れを見て、

一馬「ウム……」

ト口惜しき科しにて一寸中腰になる。

源 吾「ヤア殿の御成りに目觸りな、次へ立て——」

ト之れにて各自引張の氣味合の見得よろしく、詠への唄になりて一馬小百合は静々と奥庭の下手に這入る、花道より以前の門番走り來り、

吉兵衛「ハア上様御成りで御座りまする」

源吾「デモ此の儘では」

吉兵衛「イエ苦しいないこの仰せで御座ります」

源吾「ヲ、左様か、然らば御出向ひ致さふ」

ト平舞臺下りて平伏する、誂への囃子になり、揚幕より酒井和泉守後より茶坊主生觀老附添ひ太刀を持つて出来る、七三にて、

和泉「ヲ、源吾か、先ぶれもなく驚ろかすのふ」

源吾「俄の御成りに略服の儘の御出向ひ、眞平御免下さりませう」

坊主「イエ、櫻田氏其の御遠慮は御無用、御氣輕な御前様、今日は君臣の隔を取つて貴殿を友達と思召して、裏門口から敵打に見へられたのぢや」

源吾「何に敵打ちこは」

和泉「昨晚の圍碁の敵打ちぢや、碁敵は憎さも憎し又戀しで、僅が三目の違ひで

昨夜は汝に打ち負かされ、口惜しの餘り牛觀老を召し連れて、其の敵打ちに參つたのぢや」

源吾「これは、恐れ入たる御説かな、御召に依れば直ちに登城仕るべきに、慥々御成りは武門の譽まれ、櫻田源吾が家の面目」

和泉「コリヤ、そふ四角張るな、一騎打に陣門へ乗り込んだる此の相手、敵に後を見せまいのふ」

源吾「ハア仰せ迄もなく好める道の圍碁の御相手、碁盤に向へば目の敵、拙者に昨夜の敵きを」

和泉「ヲ、必ず打つぞよ」

源吾「失禮ながら」

和泉「返り打ちぢやこ申すのか」

源吾「ハア賢察通り」

和泉「ヤア——心憎や、碁盤の用意致せ」

源吾「ハア」

ト宜しく兩人共二重の上中央に居住ふ、吉兵衛碁盤を兩人の中へ置く、和泉は下手の白布を見て思入、生觀老も、ツクトく白布を見ながら、

坊主「門番の衆之れは……」

吉兵衛「ハイ今日暮六ツに御切腹なされます谷川様ご、小百合様この最後の場所で

御座ります」

坊主「チ、可愛そうに、御二人は御當家へ御預けになつたそうじやが、愈々今日が最期で御座りますかな櫻田氏」

源吾「御掟に依つて暮六ツの鐘を合圖に、此の所で成敗致す積りで御座る」

坊主「チ、暮六ツご申せば、モウ間も無い事で御座りますなア」

源吾「殊のついでぢや、生觀老不義者の最期を御覽なされ」

坊主「ア、他生の縁ぢや、拜見さして貰いませう」

ト言ひつゝ和泉と源吾は碁盤に石を打ち居る。

和泉「コリヤく、生觀、左様な物よりは之れへ來て予が石の手並を見るが好いわい、餘程宜い石らしく見えるぞよ」

坊主「ハイく、拜見致しますで御座ります」

ト二重へ上り正面に坐す。

源吾「コリヤ吉兵衛、暮れ六ツ近く相成れば、今の二人を之れへ引けッ」

吉兵衛「ハイモウ彼之れ六ツで御座ります」

源吾「何に未だ間は有らう」

和泉「コリヤく、源吾此の石は之れで宜いのか」

源吾「ハア……暫らく、これは一寸御待ち下され」

和泉「儲ても卑怯な奴ぢやな」

源 吾 「イヤ卑怯にては御座りません、之れを打たねば此の石が死にまする」

吉兵衛 「旦那様ソロ／＼用意ご御用人へ申上げませうか」

源 吾 「エ、五月蠅い、アツ此の石が死んだ」

吉兵衛 「イエ未だ死にや致しませぬ」

源 吾 「イヤ死んだわい」

吉兵衛 「まだで御座ります」

和 泉 「コ、耳元で觸りになる立て／＼」

吉兵衛 「ハツ……」

ト吃驚して小首を片向けながら、下手へコソ／＼と逃げる様に這入る、兩人は蔭に夢中に成り居る。

坊 主 「コリヤ御前様、其の石は悪ふ御座ります」

和 泉 「チ、左様か」

ト打ちたる石を取りかける、

源 吾 「ヤア黙られい牛觀老、助言は圍碁の法度で御座る」

坊 主 「助言ご申す程では御座らぬ、貴殿ぢやめて先刻上様に待つたご御意有つたでは御座らぬか」

源 吾 「あれごこれごは譯けが違ふ、此の石一目にて生死の別るゝ分け目の戦ひ、碁盤の石は即ち軍兵、打つ某しは即ち大將、其の大將の采配で働く石に、助言有るのは敵に兵糧送るも同然、場合に依つては許し申さぬぞ」

和 泉 「コリヤ／＼、怒るなく、大將の命を反く如き汝で無いご言ふ事は余が能く存じて居る、忠義に満ちた汝ぢやわい」

源 吾 「ハア、御賢慮仰ぎ奉る」

和 泉 「デハ此の石はかう打ごう」

坊 主 「ヤア櫻田殿の此の石は、ごうやら死んだか」

源 吾「黙まれい、之れからが勝負ぢやわい」

トキツバリと言ふ、誂への囃子になりて暮六ツの鐘を聞かす、小性金彌は雪洞を持ち來りて碁盤の傍へ置きて元の處へ這入る、同時に下手より平馬いで來りて腰をかどめ、

平 馬「ハツ又者の御目通り御免下され、我れ御主人に申上げます、くく」

坊 主「コレ源吾殿御家來衆が何やら仰在つて御座るぞ」

源 吾「ア、面倒な何事ぢや」

ト碁に現つゝ、

平 馬「只今打ちしは正昏れ六ツ、御沙汰は無けれぞ彼等兩人成敗致す時刻で御座ります」

源 吾「オ、此處へお打ち遊ばしたかなア」

平 馬「イエ未だ打たずに御座ります」

源 吾「デハ又た待つたで御座りますか」

和 泉「誰れが待つたぞ申したのか」

源 吾「デモ未だ打たず御意ありしは」

和 泉「余は左様な事は申さぬぞ」

源 吾「其れでは貴公か」

ト生觀老を見る、

平 馬「イヤ申上げたは拙者に御座ります」

源 吾「ヤア耳元で八釜敷立ち去れ」

平 馬「デハ先刻の兩人は」

源 吾「ヤア其の手を之れへ御引きなされましたなア」

和 泉「ひいたが悪いか」

源 吾「イエ苦しう御座らぬ御引き下され」

平 馬「ハア心得ました」

ト小首を片向けて元の處へはいり琴唄になる、上手より金彌三組の盃銚子を持ち来る一禮して元の處へ這入る、同時に下手より平馬先に一馬に小百合を連れて出來り舞臺にて、

平馬「下におられい——」

ト之れにて一馬小百合席につく、和泉の守を見て、

一馬「ハア御前様……」

和泉「やられたなア」

ト碁の石の事を現で言ふ。

一馬「面目次第もなき我が身の誤り」

和泉「ヤア而目もなき我が身の誤りか」

一馬「不忠の數々幾重にも」

和泉「不忠の數々幾重にもか」

一馬「御許しなされて『小百合一馬の兩人』

「下さりませ——」

和泉「お許しなされて」

ト碁盤の上の石を取る。

源吾「ア、イヤ其れは御許し申ませぬ、此の石一目が命で御座る」

坊主「ハテこれ位るの事は許して上げてても、宜いでは御座らぬかい」

平馬「ヤア許し難き不義の罪人、御家の御掟が許しませぬわい」

和泉「許して呉れは誰が言ふた、又者の身で無禮千萬エ、下れツ」

平馬「ハツ……」

ト平馬驚き元の處へ飛んで這入る。

坊主「ヤアさうやら御前の此の石が」

和泉「無念の最期か」

一馬 小百合 「ハア——」

坊主 「嗚御無念で御座りませう」

ト下の小百合一馬に言ふ。

一馬 「胸中御推察下され」

坊主 「御察し申すで御座ります」

和泉 「ア、何んほ悔みを言はれても、負けた勝負は矢張り負けぢや、源吾逆ても其方には叶ぬわい」

ト石を投げ出す。

源吾 「ハアツ、恐入り奉る」

ト平伏する生観老此の時下手へ来る。

和泉 「チ、其の方は一馬に小百合か、何時の間に来た」

坊主 「先刻より参つて居ります」

和泉 「今日當家で成敗ぢやのふ」

源吾 「ハア御説に依つて櫻田源吾、首打つ役目で御座りまする」

和泉 「ム、大儀ぢや、其方ぢや主命を能く守つたなア」

源吾 「主命守るは臣家の道、之れが忠義で御座りまする」

和泉 「オ、天晴れぢや、汝の忠義に引換へて、不義働きし不忠の兩人、一馬が父は家の忠臣、小百合の母は姉が乳の人、互に忠義の親を持ち、酒井の家に過ぎ者ご羨やまれたる親々の、忠義の顔へ泥をぬる不忠不孝の不所存者、言葉下しもならねご、忠義の親々にめで此の世の名残りの盃を取らすぞよ」

源吾 「アイヤ罪人に、お盃は破格の上意、此の義は平に」

和泉 「イヤ苦しうない、ソレ之れを取らせい」

坊主 「ハア……」

ト生観老は盃を受取る、此の時鼓の音を聞かす一馬の前へ持ち來りて盃を置く。

和泉「ア、コリや、女の方から先きに與へよ」

坊主「ハアツ、夫れ御盃を」

小百合「有り難う存じます」

ト喜んで盃を受取る坊主酌をする小百合は呑んで仕舞ふ、

源吾「左らば成敗致してくれん、我君御免」

ト下へ降る刀の提緒を襟にかける、此の内一馬に坊主は盃を渡す、奥にて話を聞かす

「高砂や此浦舟に帆を上げて、相に相生の松こそ目出庭かりけり」之れを聞き源吾不思議相に驚き、

「ヤア不義者の成敗に高砂やこは、何事だ誰だく何者ぢや」

ト言ひつゝ、キツト奥を見詰める、此の時奥よりお静の方、

静の方「誰れでもない酒井和泉守の妻がうたふた」

ト言いつゝ腰元を連れていで来る。

源吾「ヤツ貴方は奥方、何ご思ふて今の話を」

静の方「イヤ何ん共思はぬ二人の中の仲人役」

若葉「私しはかいぞへ」

五月「まち女中」

坊主「幾千代かけて」

和泉「芽出度のふ、ウハア、ハ、ハ」

源吾「ヤア我君始め方々には、血迷はれたか、不義の成敗受ける兩人、三々九度は奇怪千萬」

は奇怪千萬

和泉「言ふな源吾、汝に預けし一馬小百合其方やまだ成敗致さずか」

源吾「只今成敗仕る」

和泉「今何時か存じて居るか」

源吾「ヤツ」

和泉「早や暮六ツは遠くに過ぎ、初夜にも近き此の時刻、入相の鐘諸共腹切らせよと言いつけた主君の命を、反きたる不忠者は汝の事ぢや」

源吾「コハお情け無き御説かな、碁の御相手に夢中に成り、何時暮れたやら知らぬ間に」

和泉「時が過ぎたて言譯け立つか、碁は遊びなり、一方は人の命を二人迄散らすか散らぬの大事の關ぎわ、高が遊びの圍碁でさへ打手は大將、石は軍兵、大將の心に反むかれぬ汝の口より申せしぞ、況や命にかゝはる主人の命、忘れ果てたる不忠者めツ」

ト氣を變へて、

「こは言ふ者の其の方も忠義を誇る立派な武士、打たぬと言ふては武士が立つまい、打たで有らふ暮六ツには、慥に打つたで有らうがな」

源吾「フム……」

静の方「打たぬと言へば不忠の臣」

坊主「打つたと言ふのが、御身の爲め」

和泉「主命反いて打たぬを申すか」

坊主「コレ櫻田殿、此處が思案の真中ぢやぞよ」

源吾「ムウ……上意に依つて不義の兩人、成敗致して御座ります……」

和泉「オ、其れでこそ忠義者、酒井和泉が大事の家來ぢや、家來と言へば改めて新たに抱へた酒井の家來、此方等は夫、あれは妻、同じ我が家の祿を喰む源吾が爲にも親しき友垣、のふ生觀老」

坊主「エ、左様で御座ります、之れから先きは何事も水に流して、水魚の交り花は櫻木人は武士」

静の方「其の櫻木に繼ぐ駒、狂へる心も手綱のしめよふ、のふ源吾」
源吾「ハ、ア親しく致すで御座ります」

和泉「オ、満足ぢや、其方も兩人を祝ふてやれ」

源吾「ハア……御兩所御芽出度ふ御座るわい」

ト思入あつて頭を下げる。

一馬「實に有り難き」

ト言ひかけるを和泉守は、冠せる様に。

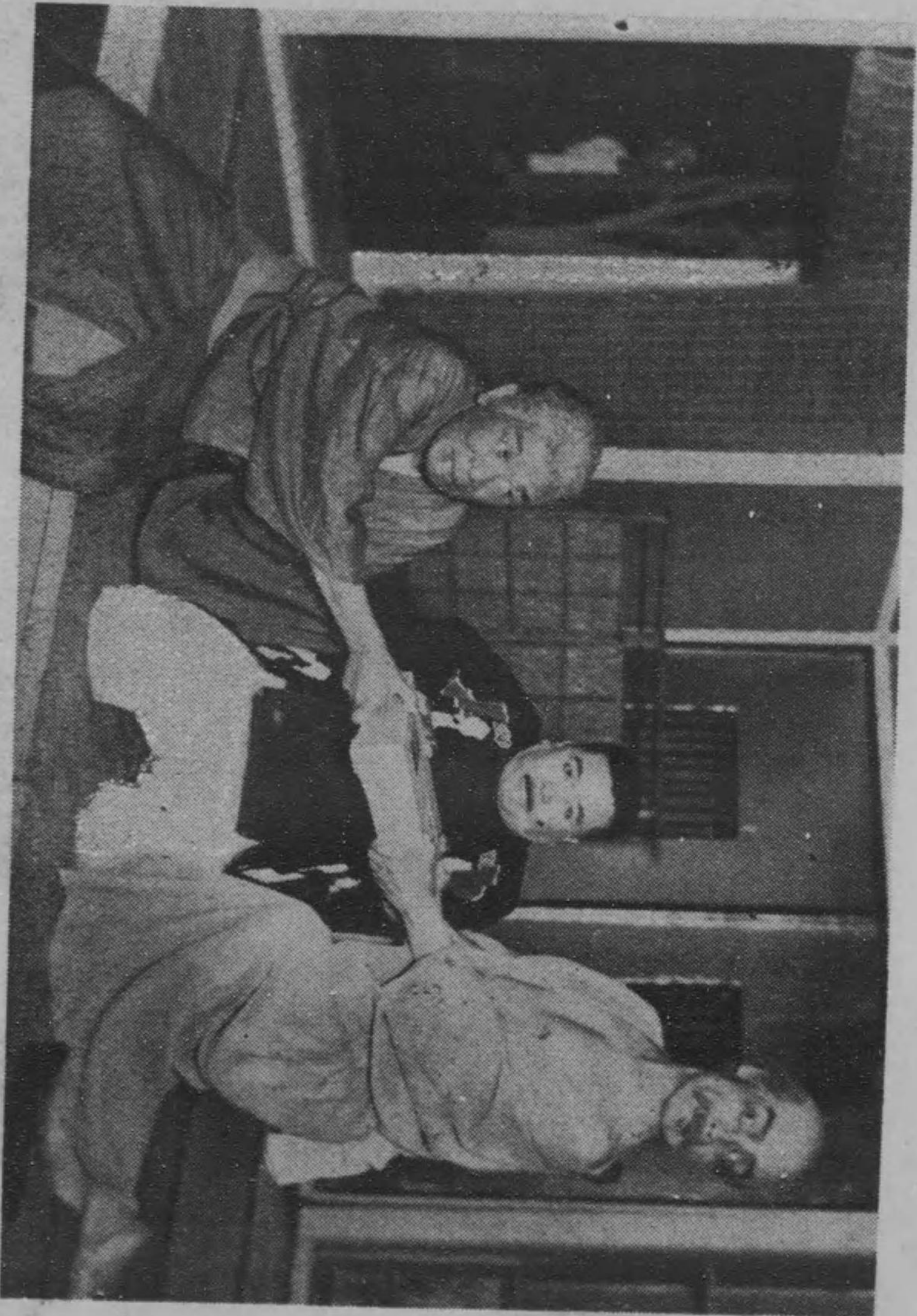
和泉「コリヤ芽出度の」

ト扇子を広げる皆々氣味合の木頭。

「芽出度の事のみ、ウハ、ハ、ハ、」

ト高笑ひ誂への上品なる囃子にて、小百各一馬は有難き科し、他は皆々満足したる科中に、源吾は妙な感にうたれたる科の内によろしく。

満
來



榎の衛兵彌

彌兵衛の榎

【三場】

る海岸の背景、所々に樹木を置く、上手に新しき標木に「新田嘉兵衛所有地」と記せしを建て、總て百鳥村街道筋の體よろしく、誂への囃子にて幕明く。

ト車力丑松、女房おまちの兩人は、榎の根方に腰を掛け、其を吸居る、傍に荷物を積みし荷車を置き、下手の方に百姓兵吉、留吉、佐吉の三人は、百姓の仕事着の拵へにて其を吸ひ居る。

おまち「サア内の人、モウそろそろ行きませうか」

丑松「八釜敷言ふなへ、モウ少し休んで行かう」

おまち「デモ今日晝までに岸和田へ這入つて置かぬと、歸りに日が暮れるわいなア」

丑松「八釜敷い言ふなへ、之れから先きにこんな宜い休み處はないぞ、此の大きな枝で日はさゝぬし涼しくは有るし、此の街道を通るに此の榎の下で休むのを樂みにして居るのぢや」

佐吉「そふぢや、く、マアく車力さん、ゆつくり休んで行きなはれ、こんな涼しい處は有りや仕まへんぜ、私等の何代前から此の榎で休んで風を入れて樂みにした、此の木もモウ四五日で伐り倒されますのぢや、名残の惜しい事ぢやわい」

丑松「へエー此の榎は伐り倒されますのかいな」

留吉「サア情け無い事ぢや、あの棒杭に書いて有る大阪の金持で新田嘉兵衛のゆふ奴が、此の地面を残らず買ひよつて、此の邊に借家の長家を建てるのぢや、夫れで邪魔になるさぬかして伐りこりよるのぢや」

丑松「へー無茶をするのぢやな、此の木一本で吾れも労働者は、その位助かるか分らぬのに、酷い事をする人ぢやなア」

おまち「ごうごかならんのかいなア、木も此處まで大きくなるにモウ神様ぢやがな何れ何千年も立つた榎の木ぢや、夫れに生きく、枝が下がつて居るのに、酷い」

「たらしい、伐り出すは何んでやいな、何んぞか其の新田さんごやら云ふ人に頼んで見たらごうやいなア」

兵吉「夫れがあかんのや、俺れの又従兄弟は村會議員ぢやよつて、此の間此の榎問題を村會で保存可決して、代表者になつて此先きの新田の別荘へ談判に行つたのぢやがな」

丑松「村會議員でも、あかんかいなア」

兵吉「夫りやお前地上權が新田のものぢや、好意の無い限り法律を楯に取つて不可んごぬかしやがるのぢやがな」

丑松「癩に觸る餓鬼ぢやなア、一體新田云ふのは何者ぢやい、留吉聞けば大阪の高利貸云ふ噂ぢや」

おまち「ハアン、内の人、路次の角の豆腐屋が差押へに逢ふた彼奴ぢやがなア」
丑松「ハア〜知てる〜あの鬼嘉の事がい」

佐吉「おつさん知つてるか」

丑松「知てるこも、大阪で鬼の嘉兵衛〜、鬼嘉云へば知らん者が無いがな、其れが此の地面を買ひよつたかい」

留吉「そうぢやがな、此の先へ立派な別荘を建て、此頃普請で大抵毎日來てよるがな」

おまち「まだ大阪で生血が吸ひたらんで、こんな處迄來よつて百姓の生血を吸ひに來よつたのぢやで」

留吉「百姓の生血吸ふなんてツ、丸て蛙の様な奴ぢやなア」

兵吉「蛙の娘にしては、アノ新田の娘は別嬪ぢやなア」

佐吉「兄貴の方も好い男ぢやぞ」

丑松「兄貴云ふのは向ふの嘉一郎云ふのぢやろ、あれは親に似ぬ慈悲深い人で、豆腐屋の差押への時も後へ來て、金をやつて慰めて歸つたごゆふ話を聞いた

ぞ」

おまち「いつそ其の息子に頼んで、此の榎を伐らんよふにして貰へんかいなア」
兵吉「夫れは如才のふ頼んだが、肝心の新田の親父が承知せんので、いよく四
五日の内に伐られるのぢやがな」

丑松「ア、名残惜しいな、永々御世話に成つた樹ぢや、皆も挨拶をせい」
ト之れにて皆榎に向ひ口々に各残を惜しむ、處へ上手より設計係り技士の洋服姿にて
設計尺を以つて出来る、後より袷天姿の人夫其の指の先を以つて地上を計りながら
で来る。

井口「オイ退け」

小坂「邪魔になる退け」

ト横柄に云ひながら百姓を突退ける、皆々突き退けられて呆然とする處へ、新田嘉兵
衛紳士の立派なる拵へにて出来る。

嘉兵衛「オイ坪数は慥に有るかッ」

井口「五百八十六坪二合五夕餘りです」

嘉兵衛「ヨシ、夫れでは向ふの方を當つて來い」

井口「ハイ畏りました、オイ百姓邪魔になる彼方へ行け」

ト横柄に云ひながら小坂を連れて下手へ捨てりふにて這入る、百姓連中は目配して互
に袖を引き合ひ頼めとの科、其内丑松を百姓が前へ突出す、丑松は嘉兵衛の前へヨロ
ヨロと出て、

丑松「へ……今日は」

嘉兵衛「何んだ貴様は」

丑松「へい御機嫌宜しう御座ります」

嘉兵衛「お前の様な人間に交際は無いが、何處の人ぢやなア」

丑松「へエ貴下の方は御見覺へは御座りませんが、此方等は宜ふ存じて居り升の

で、私は大阪の骨屋町に暮して居り升車力の丑三申ます者で、先月貴下さんに差押へ喰つた豆腐屋の裏に住んで居ります、何卒御心安ふ、へ、へ、へ、」

嘉兵衛「變な奴だなア、お前も俺も心安ふ出来る身分か、馬鹿だなア、貴様そうして何か用が有るのか」

丑松「へい外の事やおまへんが、此の榎さんを愈々御伐りなさりますそふで御座りますな」

嘉兵衛「爾うだ、地主の権利で取り拂ふのが何うした」

丑松「へい其處が御願ひで御座りますのぢやが、御存じの通り吾々此の街道を通ります車力は元より此處の百姓衆は、永年此の榎さん一本が便りで、ソレ夕立ちやヤレ暑いわご云ふ時には、此の榎の下が吾々の極樂、夫れを切り放たれましては困る者が数知れませんので、借家を御建になるにしても此の榎さんだけ置いて貰います譯には参りませんかいなア」

嘉兵衛「蟲の好い事を言ふな、俺れは貴様等だの百姓達の爲に此の地所を買ふたのぢやない、俺れは俺れの利益の爲に買ふたのだ、俺れが借家を建てるに邪魔だから、地主の権利として伐り取るのだ、義務権利の世の中だ、氣に入らなけりや裁判所で争へ、貴様にそんな権利が有るかッ」

丑松「権利が有る位なら御頼み申しまへんがな、此の樹一本切らんからこて物の三坪も違ひますかいな、大勢の人が困る事やでな」

嘉兵衛「困らんでも好いぢやないか、夕立に逢へば人力車も自動車も有る世の中ぢや、暑つけければ涼しい別荘を作つて扇風機でもかけて居りや好いぢやないか、高が榎一本を便にして暮して居るなんて、殆ど人間として社會に棲息して居る價値のない動物だ、そんな奴は國家の爲に首でも絞つて死ねばいいのだ」

おまち「オイおつさん……」

ト激して云ふ。

嘉兵衛 「おつさんごは何んだ」

おまち 「おつさんやないかいな、お前はんに見さんご云へるかいなア、おつさんやろ」

ト嘉兵衛は苦笑しながら行きかける、おまちは其の袖を捕へて、

「オイ待つてお前はん、人に物を言はして黙つて行く法が右るか」

嘉兵衛 「貴様等の様な劣等動物に口を利く必用が有るか、放せ放なさなけりやブン殴るぞ」

おまち 「エライ面白い事を言ふな、ブン殴ぐるなら殴ぐつて貰ふかい、お前はんも人間なら私たいも人間やで、義務ご権利の世の中や、一ツ裁判所で争ふか、貴様に人を打つ権利が有るか、フ、ンぢや」

三百人姓 「ヒヤ〜」

ト拍手する、嘉兵衛はジロリと見て、

嘉兵衛 「貴様等此奴ご言合して我輩を脅迫する積ぢやなア、サア脅迫するならして見よ、ヤイ貴様を代表者として警察へ突き出すから来い」

ト佐吉の袷首を取つて引張る。

佐吉 「モシ堪忍しておくなはれ、私いは何にも知りまへんがなア、オイ誰ぞ謝まつて呉れい」

ト之れにて留吉前へ進み出し嘉兵衛を手放さして、

留吉 「一寸旦那はん、待つておくなはれ、なんで警察へ連れて行かれますのや、手を叩いてなんで罪になりますのや」

嘉兵衛 「立派な犯罪だ、貧民が共鳴して脅迫的態度を示す、告訴すれば一年以上三年以下の懲役ぢや

佐吉 「オイ俺れは嫁も兒も有るがな、謝まつて〜」
兵吉 「何にを謝る事が有るものか」

ト前へ進みながら、

「オイ君、新田嘉兵衛君閣下」

嘉兵衛「何んだ貴様は」

兵吉「我輩は常百島村の村會議員です」

嘉兵衛「貴様が村會議員だ……」

兵吉「ハイ村會議員の又從兄弟で、又從兄弟村會議員です、過日村會で可決して此の榎保存案を提出しましたが不幸にも否決されました、願くば貴下の眞情に祈つて此の榎保存案を通過さして貰りたいです、噫々無情の土石くれたり共皆天地自然の賜です、況や精有る植物を伐木せんとは、無情みや云はん、慘酷みや言はん、吾々村民の樂境を横暴の手に奪はるゝ悲しき運命、憐れ貴下の御同情に依つて救はれん事を希望して止みません……云ふてもお前はんには判るまい」

留吉「判るかいなア、恁んな人には鬼の耳に念佛ぢやがな」

嘉兵衛「ナニ鬼ごは何んだ」

丑松「鬼だすがな、鬼嘉ご云へば大阪中での通り者のやがな」

嘉兵衛「其の鬼の所有地に誰れに答へて休んだか、早く立去れ、亡者共めッ」

佐吉「立去らいでかい、二度ご再びこんな處の土を踏むかへ」

留吉「鬼奴く」

兵吉「赤鬼めく」

ト口々に罵つて各自下手へ這入る、丑松は車を引き、おまちは後押して嘉兵衛に慥に梶棒を突き當てる。

嘉兵衛「氣をつけんかッ」

おまち「天下の往來や誰れに遠慮が有るかいなア」

ト慥と車をグルく廻しながら、二人は捨せりふにて慥と朝日の卷簾を落して七三迄行く、嘉兵衛は其の糞を拾ふ、これをおまちはジロリと見て、

おまち 「内の人案の定拾ひよつたぜ」

ト嘉兵衛は其を秘と袂へ隠す。

丑松 「あんな面でも極りが悪いかして隠しよつたがな」

嘉兵衛 「此の責は貴様のかい」

ト責を出して見せる。

丑松 「俺れが捨てたのぢやい、中を開けて見い」

ト嘉兵衛は其の紙を破る、中を見て馬糞が入れて有る故ハツト驚いて捨てる、二人は此の體を見て、

おまち 「座魔見やがれアハ、、、」

ト笑ひながら詠への囃子はなつて捨てざりふにて車を引き花道揚幕へはいる。嘉兵衛無念の科にて手を香ふては草杯でふきながら上手へ行きかける時、榮吉は商家の小僧の拵へにて自轉車に乗りていで來り鈴を鳴す、此の音に嘉兵衛は自轉車をよけんとし

て却つて突當りてヒヨロ／＼して後へよる時、丸井彌兵衛は盲目按摩の貧しき拵にていで來り、よける嘉兵衛と突當り二人は尻邊に仆れる、彌兵衛は此の時膝を摺むき血を出して夫れを押へながら、

彌兵衛 「ア、痛い／＼」

嘉兵衛 「氣を付け、馬鹿者めツ」

ト此の内榮吉はツン／＼勝手へは入る。

彌兵衛 「ごつちが馬鹿ぢやへ、コラツ待てこ」

ト探りよつて嘉兵衛を捕つて、

「盲目に突き當つて負傷をさして、馬鹿者こ云ふ挨拶が有るか」

嘉兵衛 「ヤツ」

ト彌兵衛の盲目を見て、シモタと云ふ思入をして、

「目あきが……盲目に突き當る慌て者め、ヤア血が出たサア承知せんぞ／＼」

彌兵衛の榎

ト逆に彌兵衛を捕へて、盲目の聲色をつかふ。

彌兵衛 「ヤアお前さんも盲目かへ」

嘉兵衛 「見て判らんかい俄か盲目に突き當つて、こんな負傷さして夫れで黙つて行くつもりかい」

彌兵衛 「エ、お前さんも盲目さんかい、ア、濟まんく、耻づかしながら私しも盲目ぢや」

嘉兵衛 「ヤアお前さんも盲目さんかいなア、痛い」

トニヤ〜笑ひながら彌兵衛の様子を見て盲目な様な眞似をする、彌兵衛はサモ氣の毒そうな科にて、

彌兵衛 「コレ大した負傷をしたのぢやないかいな。

嘉兵衛 「イヤ瓶の割でも當つたミ見えて何ふやら深ふ切れてる、ア、痛い」

彌兵衛 「それは〜氣の毒な、何んぞ藥はないかいな」

嘉兵衛 「ア、痛い〜、血が流れる〜」

ト痛そうな聲を出す。

彌兵衛 「待ちなされ、〜、サア之れで縛つて上げる、何處ぢや〜」

ト探ぐる、彌兵衛は一寸困まつた思入して、是非なく唾をべたく〜につける。

嘉兵衛 「ア、痛い〜」

彌兵衛 「オ、氣の毒にな血がべたく〜ぢや待ちなされ〜」

ト捨ぜりふにて親切に自分の古手拭にて縛りてやる。

嘉兵衛 「ハイ〜難有ふ御座ります、お前さんも負傷をなされたそふぢやないか」

彌兵衛 「イ、ヤ、私はほんのかすり傷ぢや、心配して下さるな、ア、濟みまへん〜」

彌兵衛 「大丈夫かいな、歩いて行けますかいなア、何んなら送くつて上げよふか」

嘉兵衛 「イヤモウ近くで御座りますで、夫れには及びません」

彌兵衛 「近くには何の邊ぢやな」

嘉兵衛 「ム、エ……此の先の土橋を渡つて直ぐで御座ります」

彌兵衛 「ア、左様かいな、貴下も按摩をして居なさるのかいな」

嘉兵衛 「イエ俄か盲目で按摩存じませず、倅が働いて呉れますので、何うやら斯や

ら其の日を送つて居りますもので御座りまするわい」

彌兵衛 「夫れは結構ぢやな息子さんは何にをして居なさるのぢや」

嘉兵衛 「エ、あの石津の紡績へ職工に行てますのぢや、夫れの足かぶりで御座り

ます」

彌兵衛 「成程夫れでは樂な手元やないな……お察し申まつせ」

ト同情しながら涙を呑み込み、懐中より錢入の古びたるのを取り出して、一圓紙幣を

其の中から取出して、

「誠に之れは失禮ぢやがなア、本人の私の見舞の印ぢや、何卒膏藥でも買ふて張つておくんなはれ」

嘉兵衛 「それは、氣の毒な大事御座りませんかいなア」

彌兵衛 「なんの同病相憐むぢや、私しや石津の町外れで按摩をして居る丸井彌兵

衛ご申ますでなア、モシ傷が酷いよふなら一寸知らして下され、お見舞にも行き

ますから」

嘉兵衛 「イエ、夫れには及びません、御言葉に甘へまして之れは頂戴致して置き

ます、有り難ふ存じます」

トペロリと舌を出して壹圓札を懐中へ入れる、此の時下手より土方岸本卯吉小頭の拵へにて、ヌツト出て此の様子を見て居る。

彌兵衛 「ハイ、御禮も入りますかいな」何卒氣を付けて下さりませや、向ふの土

橋が危ないでなア」

嘉兵衛「ハイ、御親切に何卒あなたも氣をつけてなア」

彌兵衛「大丈夫私しや、モウ何十年來の盲目ぢやでな、メツタに粗相は御座りませんわい」

嘉兵衛「ア、お羨やましい事ぢや、そんなら之れで御別れ申ます、ア、痛たく」

ト行きかける。

彌兵衛「ひびふ痛みますかいな……」

嘉兵衛「なんの大丈夫」

トフト卯吉の顔を見て先きからの様子を聞かれたるかと思入にて、

「左様なら有りがたふ御座ります」

ト誂への囁子になつて氣を變へて盲目の形になり、ステツキを杖にして上手へはいる彌兵衛は心配氣な捨ぜりふにて後を見送りながら、ポツ／＼行きかける、卯吉はメツ

ト前へ出て、

卯吉「悪い奴ぢやなア……」

彌兵衛「誰れや」

卯吉「彌兵衛はん、俺ぢや」

彌兵衛「ヲ、土方の卯吉さんか……」

卯吉「そうぢや彌兵衛はん、エライ目に逢ふたな」

彌兵衛「お前はん今のを見て居たのかいな」

卯吉「一寸後で見て居たが、あんまりあきれて物も言へぬわい」

彌兵衛「サアなア盲目同士の衝突でな、先の相手は俄か盲目で硝子のかけて足を切つて、エライ氣の毒な目に逢はしたのやがな」

卯吉「チイ彌兵衛はん、お前今の爺が本間の盲目と思つて居るのか」

彌兵衛「お前見て居て判らんのかいな」

卯吉「サア見て居たに依つて判つて居るのぢや」

彌兵衛「そんなら盲目ぢやないのかいなア」

卯吉「お前も永い盲目で癩の悪い、今のは立派な目明きぢやがな」

彌兵衛「夫れになんで盲目ぢゆふたのや」

卯吉「サアお前の傷をチラリ見てから、不具者に傷がさしては唯では済まぬこ膏藥代を出すの惜しさに思ひついて、俄か盲目、柄にもない泣聲をだして、泣言をぬかして、お前の出した一圓の見舞金まで捲上げて行きよるこは、畜生より酷い奴ぢやなア」

彌兵衛「コレ卯うさん」

ト杖を捨て矢庭に卯吉の胸倉を取る。

卯吉「エ、何にをするのぢやい」

彌兵衛「何にも糞も有るかい故さんぞ」

卯吉「エ、放さんかい何をするのぢやい」

彌兵衛「何にをするも有るかいなア、お前私しは古い馴染ぢや、みすくそんな詐欺に掛つて居るのにナゼ早ふ飛んで来て其奴の面の皮を引むいて呉れんどのぢや、夫れでお前近所の好しみが有るかいなア」

ト口惜しがつて涙をこぼして云ふ。

卯吉「私しも呆氣に取られて見て居たのぢやが、心配するな相手はチャンと判つて居るわい」

彌兵衛「サア何んでも紡績の職工の親ぢやこぬかしたぜ」

卯吉「何にが職工の親所かへ、今度此の土地を買ひしめた大阪切つての高利貸鬼嘉呼ばれた新田嘉兵衛ぢやがな」

彌兵衛「へエ……新田云へば此の街道の名物の榎を切りはらうこゆふ評判の爺ぢやなア」

卯吉「爾うぢやがな、く」

彌兵衛「フ、ン此の先きの別荘に居る奴ぢやなア、ヨシ……」

ト勢ひ込んで行きかける、卯吉は止めて、

卯吉「コレ彌兵衛はん、何處へ行くのや」

彌兵衛「卯うさんほつこいて、俺れは恚んな口惜しい目に逢ふた事は無い、其の新田云ふ内へ暴れ込んで、散々言ふて警察へ突き出すのぢや放してく」

卯吉「コレマアく待ち、腹も立たうが此の事件を俺れに一番任かしてくれんか」

彌兵衛「そりや任さん事も無いが、お前錢にでもする積りかい」

卯吉「チイ云ふてなや、俺れはこんな土方はしているが、卑むしい心は持つて居らぬぞ」

彌兵衛「そんならお前の手で警察へ突き出したいと言ふのか」

卯吉「サア其處がお前と相談ぢや、一番お前が犠牲になつて、此の村の爲になつてくれんかい」

彌兵衛「何に村の爲になれいとは……」

卯吉「マア慌てずこ」

ト彌兵衛の肩を押へるが木頭。

「聞いてなア、く」

彌兵衛「一體何うするのぢやいなア、く」

ト卯吉を尻向けて反對に座して云ふ。

卯吉「チイ此方ぢや、く」

ト教へる。

彌兵衛「チ、其方かいな」

ト兩人よろしく秘々話をする體にて、誂への囃子にて道具一轉する。

彌兵衛の榎

(2) 新田家別荘の場

本舞臺三間廻り縁付の數寄屋座敷、正面上手床の間を設けて書の軸をかけ、前に好みの置物正面の欄間には書の額を上げ、床に續いて書院地袋出入口其の下手上品なる色壁、見切に丸窓立派な机本箱唐木の茶棚丸桐の火鉢絹座蒲團置時計銀瓶茶道具呼鈴經息硯箱等總て上品なる好みの小道具、上手は高二重の築山を設け、其の上に西洋風の四阿屋を作り、其の中に卓椅子灰皿等を置き、柱の根元には鉢植の西洋花を四隅に置き築山の前面には、池を見せて菖蒲の盛りの體、下手は奥庭を見たる背景、枝折門柴垣等の總て別荘好みの數寄屋の體にて、眺への囃子にて道具納る。

ト二重座敷の上に娘きぬ子、令嬢の拵へにて茶を入れ居る、下手縁側に大工棟梁光三は腰をかけて居る、上手築山四阿家の中には嘉兵衛裏向になりて庭をながめ居る體。

絹子「サアお茶がはいりましたからおあがりなさいまし」

光三「へエ何うもモウお構ひなく、實は大阪から態々参りましたのは、今日は此方等へ参つて居ります若い者は晝までに休ます様に云ふて置きましたのに、午後になつても歸つて来ませんので、頭の血の氣の多い大工共、若しや途中で間違でも出来たのぢやなからうかご心配して尋ねに参りましたら、皆まだ此方に居るので御座りますな」

絹子「最も今日ね約束通り午後には大工さんが皆公休云ふ事に成つて居るのですがね、大變な事が出来て残つて居られるのですのよ」

光三「何が出来ましたのです、澤山な若い者が皆鎌を持つて此の裏の草を刈つて居りますなア」

絹子「サア夫れなんですよ、お父様があの草原を平らして借家を建てる爲に、今日晝前に地取に入らつした時にね、持て入らしやつた金時計の錠がはづれて彼の草原へ落しなすつたのですの」

光三「へええらい事をなさいましたなア」

絹子「夫れがねえ、御父様の大事の時計で、金銭で手に入らぬ佛蘭西製の懐中時計ですの、私二人で色々探しましたのですがね、判らないものですから、仕事を仕舞ふた大工さん方を集めて、三百圓の懸賞でねへ、皆に探して貰らつてるのですのよ」

光三「へえ……二百圓の懸賞で御座りますのか」

絹子「エ、爾うなの、夫れで草を薙つたら早く知れようよ皆が手ん手に鎌を持つて一生懸命草を薙り取つて探して居るのですのよ」

光三「それでは仕事で御座りますな、慥かに彼處に違ひ無いので御座りますか」

絹子「エ、あれより外へは入らつしやらないのですもの」

光三「これは私も聞き逃がせませんで、一所に探して來ても構ひませんか」

絹子「エ、誰れだつて構はないの、何卒探して來て頂戴な」

ト慌て、下手奥へ這入る、嘉兵衛は築山より降り來る。

光三「これは有り難い福の神に御目に掛つて参ります御免なされませ」

絹子「お父様未だ知れた様子も見へませんが」

嘉兵衛「知れ無いらしい、モウ半分から草を薙り取つて澤山な大工や手傳が血眼になつて居るが駄目らしいわい、惜しい事を仕たなア」

ト言ひながら座敷へ上りて居住ふ。

絹子「モウ彼れ丈けの人が探して知れないようでしたら、モウ諦めてお仕まひなさいまし」

嘉兵衛「夫りやモウ諦らめねば仕方がないわい、甘く探して呉れたら三百圓やるのぢやがなア」

絹子 「夫れぢや無意味な勞働で、あの人は可愛相ね——」

嘉兵衛 「其處が運不運の別れ道ぢやがな」

ト言ひながら絹子の入れたる茶を呑む。

絹子 「何にもお茶うけが有りません、コート」

ト考へて立上る時、大工大勢上手内にてワアと大きな聲を聞かす、之れにて嘉兵衛は立ち上つて縁端へツカ〜と出て、ジツト聲のしたる方を見て、

嘉兵衛 「慾の皮の引張つた動物が、八ヶ釜敷騒いで居るわい」

ト此の内絹子は地袋の中より節の籠を取り出して菓子鉢へ節を明ける、トタンに中より金時計が出る、ハツト驚きて思入れ詠への囃子ミンテキを入れる。

絹子 「お父さん……」

嘉兵衛 「何んぢや」

絹子 「一寸来て下さい、貴下大事のあの時計は慥にあの草原へ落しなすつたので

すのね」

嘉兵衛 「左様ぢやないか」

絹子 「夫れが何うして、此の籠の中に有るのです」

ト時計を前に突き附ける、嘉兵衛はハツトして其の時計を取つて懐中へ入れる事よるしく、之れを見て、

「お父様、〜」

嘉兵衛 「黙つて居れ〜、シツ〜」

ト大工の方へ氣を兼ねながら、静かにせよと制する科。

絹子 「何が黙つて居よです、實に貴方言ふ方は何ん言ふ猿間しい御心です、時計を此んな處へ隠して置いて、草原へ落したなんて現在の娘まで欺きて……」

ト此の時倅嘉一郎若紳士の拵へにて下手より出て來りて立聞きをする。

「澤山な大工や手傳に五百坪からの草原の草を刈らして、何になるのです、

彌兵衛の榎

實に無意味な労働ぢや有りませんか」

嘉兵衛「馬鹿、何が無意味な労働ぢや、あの五百坪からの草原の延た草を刈り取らして地馴しをさすすれば、三十人の人夫がある、一人一日二圓も見ても六十圓の入用ぢや、何んぞか夫れを救かりたいと考へた智恵袋、時計を落したから三百圓の懸賞も、大工共に言ふてやつたら、慾に目のない彼奴等が一生懸命草を刈つて地馴しをする、馬鹿な面を上から見て居るご面白いわい」

絹子「夫れが貴方は面白いのですか」

嘉兵衛「面白いごも、彼奴等は人間ぢや無い、慾の爲の獸物が汗を流がして働らいて居るのぢやわい、」

絹子「其の労働者より、貴方の方が獸物です」

嘉兵衛「何にッ、親を獸物ごは何をぬかすのぢや」

絹子「サア申上たが御腹が立ちますなら、私しを打つなり踏むなりして、あの大工や手傳に何卒懺悔をして下さい、何十人の労働者が流した汗の結晶りを欺して儲けた其の金は正しいお金ご思召すか、幾百萬の財産も私の眼からは石瓦、そんな物を貴いご貴下は思ふて入らつしやるのですか」

嘉兵衛「ウム俺れは貴いご思ふて居る、目的の爲には手段は撰ばずぢや、欺されるのは彼等の無智ぢや、甘く世間を欺したものが利口者ご世間から騒いでくれる世の中だ、俺れの體に流れる血は功名心ご野心ご金だ、場合に依ては金の爲に親子の愛も犠牲にする、貴様も父ご争ふなら此の時計を其筋へ持出して詐欺の告訴をするがよい、サア父に繩打つて突き出して見よ、例令赤い着物を着せられても、金儲けの犠牲なら更に苦痛ごは思わぬわい」

絹子「エ、ハア——」

ト泣き伏す。

嘉兵衛「聲を立てるな、不孝者めが」

トツカくと上手へ行き向を見る、絹子はハンカチーフを噛みしめて泣く、

「父の秘密が洩れるわい」

トキツパリ思入れ有つていふ、此の時下女ひさ女中の拵へにて中央の襖を明けて出来る。

おひさ 「旦那様お湯が湧きまして御座ります、オ、お嬢様ごふなされましたので御座り升」

ト泣き居る絹子に云ふ、嘉兵衛は打消す様にして、

嘉兵衛 「ナニ又氣儘を起して居るのだ、風呂へ連れよいつて顔でも直してやつてくれ……」

おひさ 「又叱られなされたので御座りますかいな、サア〜ひさやミ一所に御風呂へお越し遊ばせ〜」

ト無理に絹子を連れて行く、絹子は怨めしそふに嘉兵衛の顔を見上げて、

絹子 「お父様——」

嘉兵衛 「何んぢや」

絹子 「懺悔して下さい」

ト思入有つて両手をつく、

嘉兵衛 「馬鹿ッ」

ト手を振り上げる、お久と顔見合せ氣を變へて、

「ア—女の子は嫌だ〜」

ト氣味合ひ唄になりてお久は絹子の手を取つて行かふと目配する、絹子はしほ〜として二人は中央へはいる、又唄になりて嘉兵衛は時計を出して隠れ場所を考へながら、杏抜石の下やら額の後縁先きの下拵と隠して見る拵有つて、ト火鉢の灰の中へ隠して着物の袖に付きたる灰をはらひに縁側まで来る、トタン悴嘉一郎と顔見合せ、

嘉兵衛 「オ、嘉一郎かい」

彌兵衛の榎

嘉一郎 「お父様ですか」

嘉兵衛 「何ッ来たのだ」

嘉一郎 「只今参りました」

ト言ひつゝ上に上りて火鉢の向合せに座す。

嘉兵衛 「會社の方の整理をして来たか」

嘉一郎 「ハイ全部して参りました、時に裏の……」

ト言ひながら火鉢を自分の前に引寄せる。嘉兵衛は驚き慌てゝ自分の手元へ火鉢を引き戻す、兩人氣味合ひ、

嘉一郎 「お父さん糞を呑むんですよ」

ト卷糞を見せる。

嘉兵衛 「ジャ俺れがつけてやる」

ト取らんとする。

嘉一郎 「僕つげますよ」

ト又火鉢を取りかける、嘉兵衛は火鉢を堅く押へる。此間よろしく眞面目に面白味を見せる件。

嘉一郎 「ネエお父さん、草原で澤山な人足がお父さんの落した時計を汗を流して探して居ますわえ」

嘉兵衛 「ウム、詰らん事をしてなア、三百圓の懸賞で探がさして居るのだ」

嘉一郎 「夫れは大變ですわえ、一寸火鉢を借して下さい灰を落すのですから」
ト嘉兵衛ソツト火鉢を前に出す。

「併しそんな處を探がさすも外に有るのぢや有りませうまいか」

ト言ひつゝ、火鉢の灰を平かにする。其の處毎に嘉兵衛はハツ／＼とする科。

嘉兵衛 「コレ／＼そふ無暗に灰を掻き廻すものぢやない」

トいふ内に嘉一郎は火鉢の中の小石を狭んで庭へ捨てる、嘉兵衛はハツト立上つて其

れる見る。

嘉一郎 「ア、吃驚した、お父さん何うしたんです」

嘉兵衛 「お前今何を捨てた」

嘉一郎 「灰の中の石ころですよ」

嘉兵衛 「ア、そうか」

嘉一郎 「吃驚しますよ」

嘉兵衛 「俺れの方が吃驚するわい」

二人 「アハ、ハ、ハ、」

ト意味有氣に笑ふ、宜しく氣味合になる、下女お久出來りて、

お久 「オ、若旦那御歸り遊ばせ、親旦那様御湯へ御召し遊ばせ」

嘉兵衛 「俺れは後でもよい、嘉一郎お前一ト風呂這入つてこい、

嘉一郎 「僕今大阪で這入つて來たのです」

嘉兵衛 「モウ一遍這入りな」

嘉一郎 「モウ澤山です、マア貴下這入つて入らつしやい」

嘉兵衛 「ア、是非もないわい」

嘉一郎 「何にが是非が無いのです」

嘉兵衛 「イヤ何んでもない」

ト云ひながら火鉢を持って立上る。

嘉一郎 「お父さん火鉢を持って御湯へ御這入なさるんですか」

嘉兵衛 「アム、ナニ火を入れよふと思つて」

嘉一郎 「火は澤山有るぢや有りませんか」

嘉兵衛 「成程……」

ト火鉢を置く、嘉一郎卷蓑に火をつけんとする、嘉兵衛はハツとする、兩人又面見合して、

二人「ハハ、ハハ、」

ト氣味の悪い笑ひ方をする、誂への囃子になつてお久と共に嘉兵衛は心残しながら中央へはいる。嘉一郎は立上りて父の後を襖の透より見て火鉢の中より時計を取り出し其の代りに机の上の硝子のペンフキを入れて元の如くにして、ツカ／＼と立上りて上手の四阿家の上より裏手に向つて其時計を投げる。再び元の處へ歸り来る、此の時絹子いで來り互に兩人顔見合して、

絹子「兄さん……」

嘉一郎「シイ……」

ト宜敷思入、絹子に嘉一郎は私語く。絹子嬉しき思入れ。

絹子「夫れでは私が三百圓を」

嘉一郎「シイツ、シクレツト」

ト口に指を當てる、トタン下手よりお久ツカ／＼と出來りて、

お久「若旦那只今裏口へね、岸本卯吉と言ふ人が、親旦那に御目に罹りたいと言ふて御出になりましたして御座います」

嘉一郎「何に岸本卯吉ハテナ聞かぬ名前だ、オイお絹お父さんに申上げてこい」
絹子「ハイ……」

ト中央へはいる。

嘉一郎「そふしてごんな人だい」

お久「ヘエ土方の様な風體で、盲目の親爺に逢ひたい云ふて居ります」

嘉一郎「盲目の親爺、ウム……何か間違ぢやないか」

お久「私もそふかと思ふて何度も聞き直しましたが、間違ひぢやない云ふて居ります」

嘉一郎「マア何んでも好いから之れへ通して御覽」

お久「ハイ」

ト下手へ這入る、同時に中央より嘉兵衛ウロ／＼しながら出来る。

嘉兵衛 「岸本卯吉は、嘉一郎一體何處の人ぢや」

嘉一郎 「サア僕も考へて居るのですが、何んでも土方風の男で、盲目の親旦那に御目にかゝりたいさうて」

嘉兵衛 「ヒツ……」

嘉一郎 「お親様何か覺へがあるですか」

嘉兵衛 「イヤ詳しい事は後から話すが、取りあへず私が盲目になつて居なけりやならぬのだから、お前方も其の積りでなア」

嘉一郎 「お父さん、ナゼ盲目の眞似なんで、下らない事をなさるんです」

嘉兵衛 「悪くするに刑事問題だ、何事も後で話をする何卒其の積で……」

嘉一郎 「お父さん餘んまり危険な世渡りは、何卒仕て下さらぬよふにね」

嘉兵衛 「エ、意見するのは後にせんかへ」

トよろしく色眼鏡をかける、盲目の科、下手より卯吉手に菓子折を持つて出来る、

卯吉 「へい今日は」

嘉一郎 「サアア此方等へ来たまへ」

卯吉 「へエー初めて御目に掛ります、私は岸本卯吉といふ一寸五月蠅いものや何卒覺へてゝや、そうしてお前は……」

嘉一郎 「僕は當家の倅で新田嘉一郎といふものです」

卯吉 「ハアお前が息子か、紡績の職工といふのはそふして目の悪い爺は」

嘉兵衛 「ハイ／＼私ぢや、何んぞ用かな」

卯吉 「先程粗相をした按摩の彌兵衛の名代に見舞に來たのや、えらう痛みはせんか」

嘉一郎 「お父さん貴下傷をしたのですか」

嘉兵衛 「足を硝子で切つて、アア痛い／＼」

卯吉「モシ左の足と違ふで右の足やで」

嘉兵衛「フム……イヤこつちぢや痛い〜」

嘉一郎「お父さん何んで負傷をなさつたのです」

卯吉「オイ夫れは聞かん方がよいぞ、此の盲目は眼丈け盲目かと思ふたら、心も盲目らしい、餘んまり其れが可愛相ぢやで、按摩の彌兵衛から頼まれて御見舞の印に持つて来てやつたのぢや」

嘉兵衛「之れは〜結構な御菓子を頂きまして」

ト出したる菓子箱を見て云ふ。

卯吉「結構な御菓子で、お前目が見えるのかい」

嘉兵衛「イヤ一向に見えませんが、が盲目の考へでな」

卯吉「そうだらう見へるこいふたら事が面倒な、見えんこ言ふ方が無事ぢや、其處で俺れは使ひの者ぢやでな、此の見舞を受取つたこ云ふ受取をひこつ貰ふて歸

らふか……」

嘉兵衛「コレ悴一筆書いて上げてくれ」

卯吉「イヤ目の見えんに迷惑かけてはと思ふこ内から書いて来た、オイ之れへ判を押して」

ト證書を出す嘉兵衛受取つて読みかける。

「オイ盲目、目の見えんに讀めるのかい」

ト嘉兵衛は一寸つまつて、

嘉兵衛「コレ悴一寸讀んでおくれ」

嘉一郎「ハイ」

ト不思議の思入にて受取り、

「御見舞として菓子折一個有難く頂戴仕候 就ては當方も何か御見舞ご存
じ候得共差當り差上げるものも無く幸ひ街道筋の榎の神木、周圍の地坪四方

彌兵衛の榎

五間即ち二十坪御見舞として進上可仕候」

嘉兵衛 「忤一寸待て當名は誰だ」

嘉一郎 「丸井彌兵衛殿、地主新田嘉兵衛です」

嘉兵衛 「へエ——夫れぢや按摩……」

卯吉 「オイ目くらはん年を取つてから監獄はえらいでナア……」

嘉兵衛 「ムフ……」

ト此一寸前より彌兵衛は、下手枝折門の側へ來りて聞き居る、此の時ツカくと前へ出て、

彌兵衛 「卯吉さんたつて嫌なら貰わいでもよいぜ、警察は近いのやでなア」

嘉一郎 「君は何んだ」

彌兵衛 「其の證文の宛名の主、丸井彌兵衛と云ふ按摩ぢや」

嘉一郎 「お前がああ神木を貰ふて何うするのぢや」

彌兵衛 「ごうするものかい、あの木を伐られたら幾百人の人達が困るのぢや、私が貰へば村へ寄附して彌兵衛の榎名を付けて、盲目の手柄にする積りぢや、夫れこそ嫌なら警察が近いのぢやでなア——」

嘉一郎 「お父さん貴下あの按摩に與へる義務が有るのですか」

卯吉 「オイ兄貴、そんな事を聞いて盲目の親を酷めてやりないなナア盲目はん」

嘉兵衛 「忤何事も言はずに判を押して渡してくれ」

嘉一郎 「お父さん自分が蒔いた苦痛の種を自分で買つて入らつしやるのですね、深く立入ッて聞きますまい、あの榎の神木を村へ寄附するのは、初めからの僕の理想です、彌兵衛さんそれぢや貴方の手からごうか村へ寄附して下さい、改めてお願い致します」

彌兵衛 「卯うさん、此の小忤一寸話せるなア」

卯吉 「ご盲目の子には過ぎ者ぢやな、オイ早ふ判を押してくれ」

嘉一郎「ハイ」

ト立上り上手の机へ判を押しに行くトタン、上手築山の後より大工幸吉は手に時計を持つて走り来り、後より大勢大工出来り、

幸吉「旦那、時計が有つた〜」

トウロくしながら皆々ハイ〜と云ふ、娘絹子も此の聲で中央よりいで来り嘉兵衛は驚き、

嘉兵衛「なに時計を拾ふた」

ト火鉢を掻き探して居る、お絹は前へ出て、

絹子「約束の三百圓、皆んなで一杯呑んで頂戴」

ト金をほりやる。

大工「へい大きに……有難ふ」

ト頭を下げる、嘉兵衛は手に握れるペンフキを取出し見て、

嘉兵衛「オホ」

トよろしく氣味合にてペンフキを叩き付ける。木頭、お絹嘉一郎を嘉兵衛は脱めつける。大工連中は喜んで平伏する、嘉一郎は證文を卯吉に渡す、卯吉は彌兵衛を連れて意氣揚々として立去る、各自宜しき思入にて謎への囃子にて、

満 來

出世の鼻

【四場】

老 近 同

臣 習

田 邊 右 近

四 郎

山 中 一 馬

時 之 助

信 原 幸 造

一 郎

有 馬 玄 蕃 の 頭

三 郎

諸 士

大 ぜ い

(1) 芝御靈屋門前の場

本舞臺上手に大なる増上寺の大門を見せる、夫れに續いて下手へ一面に同寺の土塀を飾り、處々に樹木を植ゑ、稍々上手に「開帳」と記せし高札を建てる、下手に「みやのや」と染ぬきしのれん掛けの茶店、酒肴茶釜の用意あり、店の中に座蒲團店火鉢茶道具等、舞臺中央に捨床を二脚置く、凡べて門前茶店の體、賑やかなるはやしにて幕明く。

ト嘉七床木に腰を掛けてゐる、茶店の娘おかつぼんを持ちながら下手に立ちかゝり居る、

おかつ 「番頭さん此頃は御店から毎日毎夜此御靈屋へ御參詣は何事で御座ります、殊に昨夜杯は御本家の御寮人が水ごりを山内でこつてゐられましたのはなんぞ御心配な事でも出來たので御座りますか」

嘉七 「心配もく、大心配ぢや、芝の源助町で染物悉皆の大問屋ミ江戸で知られた伊勢屋の店がつぶれるか起すかの瀬戸際ぢやもの、手代丁稚衆は申すに及ばず旦那様方も命がけぢや」

おかつ 「へーごんな事がおこりましたのぢやいな」

嘉七 「お前方に話しても判るまいが、何ぞの手蔓にならうも知れぬで、話しませう、此御靈屋に納まつてある三つ葉葵の白旗ミいふのは御先祖東照宮様からの御

寶物、御靈屋御守りの御役は云はずに知れた有馬玄蕃の頭様、其御出入は私が御主人芝で知られた伊勢屋太郎兵衛、先頃御寶藏に雨が漏り其大切な白旗にべつたり汚染がついたので、是が御用を承り御店で汚染を落した後、干場ではかしておいた所、五日前の天狗風にさらはれて、其御旗の行方知れずサア〜大變に家内中狂ひ騒いでも後の祭、今では御屋敷へも知れ渡り上を下への大騒ぎ、明日中に其御旗がいよく知れぬさきまつたら、御店は闕所其上に有馬の殿様は御切腹、かゝりやつながら御店一同、飯に放れてちり〜ばら〜叶はぬ時の神だのみこ此東照宮様へ日参ぢや」

おかつ「成程、それで判りました、御出入の芝の頭、久利加羅の親方も毎日々々の御日参もやつぱりそれで御座りませう」

嘉七「それでは頭も日参しているか、町人ながら男一匹、御主人様の恩を思ふて日参は嬉しい心掛けぢや、私からよう御禮を云ふたご云ふて下され」

おかつ「へい〜かしこまりました、これあつてお茶を一つ」

嘉七「いや〜此頃茶だちぢや茶だちぢや」

おかつ「それでは茶だち詣りで御座りますな」

嘉七「それは裸足詣りぢや」

兩人「あは〜」

ト笑ひながらおかつ店の中へ入る、花道より大和六兵衛二十五六の愚鈍らしき百姓の旅姿振り掛荷物三度笠を持って出で来る。

六兵衛「あゝ錦繪より外に見た事の無い江戸の景色、村の祭より賑やかな、國のお母に見せたいなあ、(居直り)おい〜一寸物を聞くがな」

ト出突けに云はれて嘉七びつくりして、

嘉七「ほゝえらいほん〜云ふ人ぢや」

六兵衛「芝の御靈屋様は此處か」

嘉七 「そうぢや」

六兵衛 「中へ入つたら錢ごるか」

嘉七 「何の信心詣りぢや、無代ぢや」

六兵衛 「安いものぢや、是を無代で見せてよう引き合ふな」

嘉七 「見せ物見たように云ふなへ」

六兵衛 「今品川云ふ所で聞いたのぢやが、江戸へ出て来て出世をするのは此御靈屋へ御願ひするご出世が出来るさうぢやな」

嘉七 「そりやまあ一心さへ通じたら、出世の出来ぬものでもあるまいわえ」

六兵衛 「きつご受合ふか」

嘉七 「そんな事おれが受合へるかえ」

六兵衛 「たよらない神さまぢやなあ」

嘉七 「ごんな人間でも神信心をして一生懸命正直に働いたら出世の出来ぬ事も

有るまいわい」

六兵衛 「そりやまあ一生懸命正直に稼ぎさへすれば此神様へ願はいでも出来る出世なら出来るなあ、それではおがまいでもおがんでもマアく、同ぢやなあ、

嘉七 「おかしな男ぢやなあ、折角来たのならおがんで行けよ」

六兵衛 「そんなたよらない神様に暇つぶしてられんわい、お前さんも此處へ参りに来たかえ」

嘉七 「已は毎日々々日参ぢや」

六兵衛 「このたよらない神様に日参はお前も一寸たよらない男ぢやなあ」

嘉七 「口の悪い人ぢやなあ」

六兵衛 「うふふふふ、さよなら」

嘉七 「氣味の悪い男ぢやな、おい／＼まてまて」

六兵衛 「何ぢや」

嘉七「見た様子では御前はほつこ出ぢやな」

六兵衛「ほつこ出？ 己はそんなものぢやないわえ、大和の國の百姓で六兵衛云ふものぢや」

嘉七「はーん、贅六か」

六兵衛「贅六ぢやない六兵衛云ふものぢや」

嘉七「六兵衛は判つてゐるが御前のやうな人間を此江戸では贅六云ふのぢや」

六兵衛「江戸まで来るこ、なぜ己の名が變るのぢや」

嘉七「御前のやうな人間を、そつたい贅六云ふのぢや」

六兵衛「そつちが云ふてもこつちは六兵衛ぢや」

ト不興の顔にてぢつと白眼む。

嘉七「面白い男ぢやマア、怒るなく、始めての江戸なれば云ふてやる事もあ
る、一寸此處へ来て床木にかけよ」

六兵衛「いやぢや花の御江戸でウツカリ茶店へ腰を下ろせは茶代を取られる國で
聞いて来た」

嘉七「御前のやうな者に茶代を出さすかえ」

六兵衛「きつこかえ」

嘉七「しかられてゐるやうぢやな、まあさあ、おかけよく」

六兵衛「きつこいしよ」

ト嘉七の下手へかける。

嘉七「御前は大和の何處ぢや」

六兵衛「己は大和の國吉野郡吉野村の百姓で六兵衛云ふのぢや」

嘉七「その六兵衛が何と思ふて江戸へ来たのぢや」

六兵衛「サア出世を爲様と思つて来たのぢや、己は昔は庄屋の息子ぢやが、父爺の
心得違ひから御庄屋の株を取上げられ、五つの年から水呑百姓、一人の母ぢやが

残念がりて元の庄屋にしてやりたいと思ふなれど、
 村の庄屋殿のおつしやるには、
 お武士の御屋敷奉公にでも住込んだら出世の出来ぬものでもない
 から矢も楯もたまらず母者人に暇貰うてやつ今こゝ迄着いたのぢや」
 六兵衛 「それは立派なよい心掛ぢやが、此江戸に誰ぞ頼る人でもあつてかえ」
 六兵衛 「なんにもない」
 トキツバリ云ふ。

嘉七 「たよらない話ぢやなあ」

六兵衛 「けれ共御庄家様がそう云ふた誰に頼まふの、かれに頼まふの云ふ頼み心
 があつては駄目ぢやけな、六尺の横鼻禪一本此兩腕が己の頼みぢや」

嘉七 「成程心掛は立派ぢやが、そりや駄目ぢや中々江戸云ふ所はそんなたやす
 い所ぢやない、何を云ふても土一升到金一升ぢや」

六兵衛 「此土が金一升はよい値段ぢや」

嘉七 「イ、エものゝたごへぢや、生馬の目を抜くといふ所ぢや、私ぢやからよけ
 れども、ほん引にでも掛つたら身つまりぢやぞ」

六兵衛 「ほん引は何ぢや」

嘉七 「なんにも判らぬのぢやなあ、ほん引云ふのは御前のやうなほんくら見
 て取つたら直に内へ連れて歸つて先づ三四日はうまい物を食はして、お江戸見物さ
 せその上で、荷物から路銀まで巻上げられて、三年先の給金まで先借りをして逃
 げられる、後で御前が泣きの涙云ふやうなひさい目に逢はす奴がたんこある」
 六兵衛 「ふむう、するこおらの國で云ふ先づ盗人ぢやなあ」

嘉七 「先づ早く云へばそうぢや」

六兵衛 「お前もそうか」

嘉七 「阿呆ぬかせ、己は芝の源助町の伊勢屋云ふ呉服染物屋の一番番頭で嘉七

「云ふ者ぢや」

六兵衛 「人相があまりよくないで、若しやと思ふた」

嘉七 「何をぬかすのぢや」

六兵衛 「マア、怒りなさんな、腹の内と思ふた丈ぢや、マアそれでは澤山なあの人通りの中でそれがほん引ぢや」

嘉七 「そんな事が判るかえ、先づ人を見れば盗人ぢや、明日は雨ぢやと思ふたら間違ひはないわえ」

六兵衛 「それぢやあの江戸の人達を、盗人ぢやと思ふていたら間違ないかよ」

嘉七 「まあ、御前のやうなほんくらは、そのくらゐに思ふていてよいわえ」

六兵衛 「あゝ江戸はよい所ぢやと聞いて來たのに盗人のより合ひかえ」

嘉七 「こゝろそんな事大きな聲で云ふなえ、物のたこへを云ふてやるのぢや、お前のやうな人間が江戸へ來て出世をしよう云ふのが心得違ひ、蛙の子は蛙で果て

るでひさい目に逢はぬ内、國へ歸つて鋤耒持つて一生百姓で送る方が先づ上分別ぢや」

六兵衛 「あゝそんな事知らずに國の母者人に水盃までして、えらい所へやつて來た、盗人ばかりの御江戸には片時居るのも厭ぢや二兩足らずの路銀があるのを幸ひに東海道を元來た道へかへり升」

嘉七 「そう、それがいゝ、悪い者につかれぬ内早う國へ歸りなされ」

六兵衛 「江戸にもお前のやうな親切な人のあるのが嬉しい、必ず悪い事をせぬように、長生きせよ」

嘉七 「氣味の悪い事を云ふなへ」

六兵衛 「それではこれで歸ります」

嘉七 「私も長話で手間がされた、わしも歸らう、をいゝ姉さん」

ト茶店に向つて呼ぶ、

おかつ 「はい、御用で御座りますか」

トいぜんのおかつ、出来る六兵衛はハツと飛びのき。

六兵衛 「ひやーこれは女のボン引か」

ト云ふを押へて、

嘉七 「これ何を云ふのぢや、これはみのやのおかつご云ふ此家の娘ぢや」

六兵衛 「あゝそふか己は又女のボン引かと思ふたハ——」

おかつ 「あらまあいやな唐變木だね」

六兵衛 「唐變木は己かい又名が變つたナア」

嘉七 「これ〜おかつさん氣にかけてやるなへ田舎育ちの贅六だから、何も知らずに江戸へ来たそうぢや故、今意見して國へ歸れご云ふてやつたのぢや」

おかつ 「そうで御座ります共、早くお歸りよ、お前のようなほんくらが江戸の町にまご〜してゐるごお尻の毛まで抜かれるよ」

六兵衛 「ひやあ、おそろしい所ぢやなあ、己れの尻の毛を何に用ゐるのぢや」

嘉七 「あは〜、萬事この寸法だ、おい〜おかつさんお茶代ぢや」

ト百文錢を渡す、

おかつ 「毎度ありがたう御座ります」

六兵衛 「なんほやつたのぢや」

おかつ 「百いただいたのぢや」

六兵衛 「何を食つたのぢや」

嘉七 「何を食べるものかへ、湯一杯ぢや」

六兵衛 「湯一杯が百文かフウナー、こんな所になほさらいられぬ」

嘉七 「それぢやによつて早く歸れよ」

六兵衛 「はい〜ありがたいかへります、おまへさんもかへる道でボン引にかゝらぬ様氣を付けナ」

嘉七 「ごんだしつべいがへしだあはゝゝ」

ト捨臺詞にてにぎやかな囃子に連れ、嘉七下手へ入る、お勝六兵衛の前へ来て。

おかつ 「お前さんお茶飲んで行くかへ」

六兵衛 「いやちや湯一杯が百もこる、茶でも飲むご三百も取られるわへ」

おかつ 「馬鹿だねお前なんか茶を飲ましお錢なんか取るものかね」

六兵衛 「なぞごうまくぬかして江戸の奴は油断がなるかへ」

おかつ 「えゝごうごも勝手におしよ、ひょうろく玉だね」

トイヒ捨てゝ笑ひながら元の茶店の中へ入る。

六兵衛 「ひょう六玉、あんまり聞かぬ名前ぢやなあ」

ト此時下手空より鳩が白旗をくはえて山門の瓦の中へ入る、六兵衛アツと呆れて尖れを見つめて、

六兵衛 「やゝ鳥がまつ白の絹の布に芋の葉三枚書いてあるものを喰へて、あの瓦の

下へ入つたぞ、江戸ご云ふ所は人間斗りボン引ご思つたら鳥までボン引をするのぢやなあ」

ト此時誂への派手なはやしになり久利伽羅龍五郎立派な侠客の拵へ、續いて乾分丑松、寅吉、卯之助、辰三の四人を連れて花道より出来る。

丑松 「ねえ親分氣味の悪い事だねへ、お前さんが内を出るご後から目あかしがついて歩いてゐるよ」

寅吉 「悪い事もしねえお前さんが、御上から手が入るごはおかしいぢやねえか」

卯之助 「人入れ稼業こそしてゐるが、賭博も打たねえおめえさんが、お上からにらまれる譯がねえ」

辰三 「をれが五人組へでも行つて譯を聞いて来ようか」

龍五郎 「えゝ往來でやかましふ云ふなへ、一昨日あたりから町役人衆に目をつけられる事は知つてゐるのだ、今度そゝうで無くした白旗、御恩になつた伊勢屋の御